

瓦版なまず 16



震災・まちのアーカイブ

巻頭言

震災から9年目の春である。神戸にも桜前線が届いて長田神社では今が盛りと咲き誇っている。

さて、2003年度はアーカイブと関わりを有する人々にとって最も意義深い年として回顧されるかも知れない。まず、2003年7月8日から9月21日まで、国立歴史民俗博物館で「ドキュメント災害史 1703-2003」が開催された。2年間の共同研究を含めたこのプロジェクトは、同館の20周年記念展示であると同時に、阪神大震災を担当した寺田匡宏氏の、思索と実践のひとつの精髓を示したものとも言えよう。

一方、神戸では同じ年の4月に阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」(神戸市中央区)の2期施設として「ひと未来館」がオープンしていた。同館は、「いのちの尊さ」を震災から得た教訓であるとして、「癒し」を提供する体験型ミュージアムと位置付けられている。隣接する芦屋市では財政難から市立美術館が存亡の瀬戸際にある反面、神戸では存在意義の不明確な公共施設が数十億円を投じて建設されるという、ミュージアムや

文化行政をめぐるいびつな構図が浮き彫りとなっている。

ところで、笠原一人氏の報告などから

も分かるとおり、寺田匡宏氏主宰の[記憶・歴史・表現]フォーラムでは2003年度に天草および水俣(8月)、そしてベルリンならびにポーランド(10月)を研究のため訪れている。同フォーラムが提示する研究成果の中で、それらの訪問地で得られた知見が反映されることであろう。

2003年はアーカイブが設立5周年を迎えた年でもあった。それを記念して10月16日に

『アーカイブ前史』が刊行され、CD-ROMを封入した同書については神戸市役所において完成の記者発表も行なわれた。おそらく、5年という歳月の経過は参加者や支援を寄せて下さる方々の熱意の持続を表すとともに、なおもアーカイブに存在する意義が、もしくは存在し得るための「水脈」が、たゆたいながらも流れていることを示すものではないだろうか。

年度末にお届けする「瓦版なまず」から、さまざまな1年を感じ取っていただければ幸いである。(菅 祥明)



痕跡論 3

笠原 一人

前回の「痕跡論2」(註1)に対しては、いくつかの意見を頂いた。その中に「記憶はモノを介して残されるのではなく、個人の心の中にあるはずだ」という主旨の意見があった。私が「記憶は人の心ではなく『痕跡』に宿っており、『痕跡』を介してばら撒かれるようにして伝えられていくしかない」と書いたことに向けられた批判であるように思う。

だが、私が論じているのは、主体の「内」なる想いや個人的な記憶の問題ではない。過去の出来事を、現在の我々や未来の誰かが共有(実際には「分有」しか有り得ないが)することはいかに可能かという問題である。出来事の当事者を超えて継がれていく記憶は、現物や写真や文書といった主体の「外」にあるモノを媒介せざるを得ないはずだ。個人的でナイーブな想いや記憶は、現実には誰にも共有し得ず、個人の「心」にとどまるしかない。そもそも「心」が「主体」の「内」にあると考えることもまたナイーブである。「心」もすでに「主体」の「外」にある「他者」として捉えることから始めるべきだろう。

過去の出来事の記憶に、現在の我々や未来の誰かがどのように関わっていくのが問題なのであり、この「痕跡論」(註2)はその方法論を問うていることを確認しておきたい。

さて、そんな過去の出来事への関わり方を教えてくれる優れた表現者がいる。

建築家・宮本^{かつひろ}佳明である。宮本の建築作品は、阪神・淡路大震災以降、「痕跡」との関わり方のバリエーションを示していると言える。建築家が、出来事の記憶を刻んだ「痕跡」とどのように関わろうとしているのか。限られた誌面ゆえに十分検討することはできないが、宮本の作品から「痕跡」との関わり方のヒントを得たい。

まず1998年に竣工した『「ゼンカイ」ハウス』(図1)を取り上げよう。阪神・淡路大震災で被災して全壊判定を受けたものの、修繕によって再生された宝塚の住宅である。木造の長屋の一軒が切り取られ、補強のための鉄骨が室内外に差し込まれた状態で建っている。被災した建築の野心的な保存の方法が高い評価を得た一方で、その表現が過剰であり恣意的ではないかと批判された。



図1 「ゼンカイ」ハウス

この作品は、「痕跡」との関わり方を示すものとして読み直すことができる。「公費解体」という震災の「痕跡」の根絶に対する抵抗の表現であるが、ただ「痕跡」を保存しようとしているのではない。震災

の「痕跡」である住宅に、鉄骨による新たな「痕跡」を「重ね書き」していると言える。「痕跡」の「重ね書き」は、我々が過去の出来事に創造的に関わるための一つの方法である。ここでは、表現の内容に興味があるのではない。「重ね書き」という、「痕跡」に関わるための文法や方法こそが表現されていると理解するべきだろう。

1996年のベニス・ビエンナーレの日本館の展示も興味深い。神戸で捨てられた震災の瓦礫を会場に運び込み、被災した街の様子を写した写真や震災当時のラジオ放送の音声とともに「再構成」した「崩壊」のインスタレーション作品である。これはグラン・プリを獲得したが、「崩壊」を見せるのは新たなプランを示すべき建築家や都市計画家としての役割を放棄している、と批判の声も挙がっていたという。

だが、これもまた「痕跡」への関わり方を示したものとして読み直すことができる。震災の記憶の「痕跡」としての都市の瓦礫は、瓦礫となることで初めて遠く離れたイタリアに移動が可能となった。「痕跡」は本来、時間的・場所的な「差延」(J. デリダ)の効果によって移動可能性を備えており、それゆえ「未来」や「他者」に開かれている。この作品は「痕跡」に内在する移動可能性そのものを顕在化していると言えるだろう。

震災復興住宅として建設された南芦屋浜公営住宅での「コミュニティ&アート計画」における宮本の作品「サクリファイス」(図2)はどうだろうか。芸術家や建築家によって団地内の公共空間にアート作品を設置するプロジェクトで、宮本は断片化された複数の防潮堤のオブジェをデザインした。埋め立てによってできた団地の敷地がかつては海であったことを

意識したものであり、「海の記憶」を顕在化させ「歴史を捏造」したのだという。

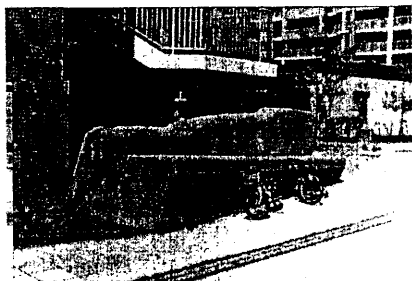


図2 「サクリファイス」の一部

この防潮堤そのものは宮本が新たに造ったものだが、かつてそこに防波堤があったことも確かだ。「海の記憶」の「痕跡」としてのこのオブジェには、事実と虚構の両義性を読み取ることができる。だが「痕跡」とは、本来そのようなものである。過去の出来事を刻み付けて現在「ここ」に確実に存在するが、出来事そのものはもはや存在せず、想像するほかない。宮本は、「痕跡」が潜在的に有する事実と虚構、あるいは確定と不確定の両義性を顕在化させようとしているのだと言える。

さらに2001年に竣工した「苦楽園」(図3)はどうか。西宮市苦楽園の急斜面の敷地に建つ住宅である。斜面から飛び出したボリュームには長いスロープが巻き付けられているが、このスロープは垂直動線や構造体、開口部に対する庇など「一石五鳥」の役割を果たすという。また斜面を利用して5層の床が設定されているため平地よりも5倍も面積が稼げる。つまり、建築の様々な仕掛けを駆使して、斜面という敷地の特性を「使いたおす」というものである。

ここでは、斜面を敷地の自明な環境と理解してしまうのではなく、山の隆起の「痕跡」として読んでみよう。すると、建

築の様々な仕掛けによって斜面を「使いたおす」ことで、斜面という「痕跡」の潜在的可能性を最大限に引き出している」と理解できる。新たな仕掛けが「痕跡」の可能性を増大させているのである。これもまた「痕跡」への関わり方の一つであろう。

また宮本は震災後、都市の中で近代的都市計画の均質化に抗して残った、土木的な異物や空間的な齟齬の



図3 苦楽園

ようなものを発掘し、名前を付ける作業を続けている。例えば、神戸市内を流れる住吉川がJRの線路を跨ぐ天井川「天井河底トンネル」や、断層のズレによってできた急なカーブの坂道「芦屋断層ダウンヒル」などがある。

これは、都市に埋もれている出来事の「痕跡」を発掘する作業だと言える。この「痕跡」は、都市計画という人間のコントロールから逃れて偶然に生み出されたものであり、齟齬やズレである。そして、この作業によって「痕跡」との偶然的な出会いという新たな出来事も生み出される。偶然の産物との偶然の出会い。宮本の作業は、都市の「痕跡」が潜在的に有する偶然性を炙り出しているように見える。

宮本は、出来事の意味内容や記憶に囚われて「痕跡」の前に沈黙したり、出来事を「再現」したりすることはない。制作を通じて積極的に出来事の「痕跡」に

関わり、「痕跡」の特性や潜在的可能性を顕在化させようとする。喩えてみれば、CDに記憶の意味として録音された音に耳を傾けるのではなく、CDの丸く薄く光沢ある表面といった形の特性を生かして、転がしたり投げたり光を反射させたりしているのである。それによって、意味ではなくモノとしてのCDの記憶を顕在化させようとしているのである。

この作業は、ほとんど意味のないことのように思えるかもしれない。しかしそれは、過去の出来事に対して現在の我々が主体的に、アクチュアルに関わる適切な方法であると言える。

過去の出来事の意味や真実性に囚われることは、過去の出来事の特権化し、その記憶が出来事の体験者や当事者のみに「占有」される事態をもたらすことになる。「再現」はその最たるものである。それは人々にリアリティはもたらすかもしれないが、記憶へのかかわり方は受動的なものにとどまる。

それに対して宮本の活動は、「痕跡」に関わることで、万人がその出来事に主体的かつ創造的に、そして自由に関わる方法を示している。これによって過去の出来事は、現在の新たな出来事に生まれ変わるのである。(続く)

(京都芸繊維大学助手、建築史・都市史)

(註1) 笠原一人「痕跡論 2」、『瓦版なまず』第15号、2003年6月、p.1~3

(註2) 連載第1回目は、笠原一人「痕跡論」、『瓦版なまず』第13号、2002年7月、p.2~4

*

空間と時間のよみがえる場所

——「ドキュメント災害史—1703—2003」——

大門 正克

2003年8月3日は久しぶりの佐倉であった。国立歴史民俗博物館で「ドキュメント災害史——1703—2003」をみるためである。博物館では、展示を準備した1人である寺田匡宏さんと都留文科大学の卒業生・在校生らと待ち合わせた。以前に寺田さんを都留文科大学に招いたからであり、当日は総勢10名のにぎやかな佐倉になった。

2001年に始まったこの展示の準備過程では、通信『歴史・災害・展示』が11号まで発行されており、2年間の調査・研究の成果や災害展示の方法論、参考になる展示の訪問記などが掲載されていた。A4判で24ページ立て、写真をふんだんに使った通信は毎号読むのが楽しみであり、2003年夏の展示開催に向けた期待が徐々に高まっていった。

いくつかの試みがつまった展示であった。まずは歴史学者と自然科学者の協同による展示。言うは易く行うのは難しい協同に対して、この展示は新たな可能性を切り開いていたように思う。たとえば、出羽国で1804年におきた象潟地震については、歴史学と火山地質学の協力のもとで、文字史料の読解をふまえた地震による地形への影響が復元されていた。

展示物のそれぞれに担当者の似顔絵・名前・メッセージを書きとめた記名展示という方法も斬新だった。展示期間中には、講演会や記念集会、子ども講座、ギャ

ラリートークが数多く開かれていた。ギャラリートークでは、展示を企画した研究者が連日のように解説に立っており、私の行った日には、火山列島論を専門にされている荒巻重雄さんが解説をしてくれた。企画者の顔の見える展示をめざしていることがよくわかった。

空間と時間のよみがえる場所、これが展示を見終わった私の感想だ。展示は博物館の構造をたくみに利用し、仕切られた展示室だけでなく、受付から展示室へと至る外階段や図書室前のスペースも活用されていた。展示室のなかでは最新のコンピューターグラフィックや立体地図などを活用して、さまざまな地震が復元されていた。博物館の構造とCGなどの両方を活用することによって、地震は空間のひろがりのなかで浮かび上がっていたように思う。

時間をもっとも鮮明によみがえったのは阪神・淡路大震災をテーマにした最後のコーナーだ。コーナーの冒頭には、季村敏夫さんの詩が映像で映し出され、ついで阪神大震災のボランティアを撮った北川幸三さんの写真集『風が運んだ救援隊』（長征社、1996年）から11枚の写真が掲げられていた。写真の下スペースは「風が運んだ救援隊 2003」と題され、北川さんの写真に写った「ボランティアの体験者4人に最近インタビューした」ビデオが4つのテレビにくりかえし流されていた。

北川さんの撮った4人の写真と、2003年に試みられたビデオをずっと見てみると、阪神大震災もまた時間のなかにあることを実感させられた。

1995年から2003年へ、ここでは8年間の時間がたしかに流れていた。その時間にはいくつもの意味が込められているように思えた。1つはボランティアに参加した人たちにとっての時間。大学生や高校生のときなどにボランティアに参加した4人は、インタビューのなかで1995年当時を振り返り、さらに8年間の時間の経過を見つめるように今を語っていた。インタビューを試みることで時間の経過がよみがえる。それはおそらく、当人たちもおぼろげにしか自覚していなかったことなのではないかと思う。あるいはまた、ビデオを見ている側の私たちも時間のなかにいることを実感させられる写真とインタビューという方法。

インタビューには、共通性と個別性の両方が刻まれていた。ボランティアに参加した事情はさまざまである。その事情のなかに見え隠れする時代のかけら。4人のインタビューには1990年代半ばという時代の共通性が刻み込まれている。だが、他方で4人には固有名詞が書きとめられていたように、インタビューの内容はさまざまである。それぞれの事情を語る静かな声を聞いていると、私にはこのインタビューが、震災を安易な共通体験にまとめようとする誘惑に抗しているように思えた。共通性と個別性の両方を浮

かび上がらせる4人のインタビューという方法。

こうしてみれば、最後のコーナーでよみがえった8年間の時間は、企画をした寺田匡宏さん自身がたしかめようとした時間でもあったように思えた。インタビューからは、まだ姿かたちのとらえにくい阪神大震災を時間によって位置づけようとする意図や、個別性にこだわる寺田さんの思いが伝わってきた。それは今回の展示に対する寺田さんの方法でもあったのだろう。

最後のコーナーで垣間見られた災害の時間は、今回の展示全体にもりこまれていればなおよかったように思えた。展示のサブタイトルは「1703-2003」である。300年という時間の経過。2003年という今から振り返る300年間の災害。今回の展示全体で時間がよみがえり、時間と空間が交差していれば、壮大で重層的な展示になっただろうし、歴史学と自然科学者の協同にいつそうふさわしい場所になったように思う。

ところで、最後のコーナーは展示室から少し離れた図書室前の一角をそっと利用していた。展示室を離れた場所を使ったのは、単なるスペースの問題だけだったのかもしれない。だが、この場所を使うことで、最後によみがえった災害の時間はかえって展示室全体を照らし出し、今回の展示の意義と可能性の両方を浮かび上がらせていたように私には思えた。

(横浜国立大学教員、歴史学)

書籍紹介①

『建築の終わり 70年代に建築を始めた3人の建築談義』（岸和郎・北山恒・内藤廣著、TOTO出版、2003年5月発行）3人の建築家（岸・北山・内藤）が建築を始めた70年代からを振り返って現代を考察する建築談義。そこで話題にのぼったいくつかのテーマを、90年代に建築を始めた2人の建築家（笠原一人・日埜直彦）が独自の解析を試みている。

報告：ベルリン／ポーランド —記憶の多層域—

笠原 一人

昨年10月5日から13日にかけて、寺田匡宏氏が主宰する「記憶・歴史・表現」フォーラムの1年目を締めくくる旅として、ベルリンとポーランドを訪れた。ベルリンとポーランドは、近代以降多くの負の記憶を抱えている。ナチス、ホロコースト、第2次世界大戦、壁の設置、社会主義、壁の崩壊など。今回の旅はこれらに関係の深い場所を訪れた。参加者は11名。誌面の都合上十分に論じることはいできないが、旅の記録とともに若干のコメントを付しておきたい。

まずベルリンでは、ツアー共通の見学としてカイザー・ヴィルヘルム記念教会、ブランデンブルグ門、ドイツ連邦議会議事堂、ユダヤ人犠牲者慰霊碑建設予定地、ユダヤ博物館、壁博物館、テロのトボグラフィ、壁の跡地、ゲズンドブルネン駅周辺の地下ツアー、ナチスの要塞、博物館島、ベルリンの壁記録センター、プレッツェンゼー監獄跡地、ポツダム広場周辺などを訪れた。また自由時間には個人的に、ナチス時代に建設されたオリンピックスタジアム、スターリン体制下に建設されたカール・マルクス通りの「社会主義リアリズム」様式の街並みを見学した。

誤解を恐れずに言えば、ベルリンは歴史の「浅い」都市である。13世紀に現在の博物館島周辺に街が造られたことに始まるが、現在目に見える建物は、ほとんど18・19世紀フリードリヒ王の時代以降の

ものである。カイザー・ヴィルヘルム教会のロマネスクも、ベルリン大聖堂のバロックも、博物館島を占める建築の群の古典主義も、すべて19世紀以降のリバイバリズムによるものである。一見、歴史的と見えるベルリンの街だが、歴史への憧憬とコンプレックスによって「近代」に捏造された「浅い」歴史が溢れている。そしてその中に、大量の負の記憶と痕跡が眠っているのである。中でも目立つのは、「帝国」やナチス、ユダヤの記憶と痕跡をめぐる表現だろう。

例えばライヒスターク（ドイツ連邦議会議事堂）は、19世紀末に建てられた古典主義の建築である。第2次大戦で廃墟と化したのが、東西ドイツ統一後、建築家N. フォスターによって国会議事堂として再生され、今や観光名所となっている。

そのそばに建つブランデンブルグ門を挟んだ反対側には、2005年完成を目指して建設中のユダヤ人犠牲者慰霊碑の敷地がある。ユダヤ系建築家P. アイゼンマンの設計で、墓石のような直方体が敷き詰められたものになる予定である。

さらにそこから遠くない場所にユダヤ博物館がある。ニューヨークのテロ事件跡地の再開発をも担当するユダヤ系建築家D. リベスキンドが設計した。建物全体に、覗くことはできるが入室不可能な（従って「意味」を満たせない）巨大な空洞を貫かせることで、出来事の表象不可

能性やベルリンにおけるユダヤの痕跡の不在を表現している。負の記憶の空間表現としては、極めて優れた表現である。

ライヒスタークの表現については、フォーラムのメンバーと交わした議論が興味深かった。氏は、ドイツ帝国を表象する建築に新たなドームを設けることで「帝国」の復活を安易に祝福しているとして批判する。確かに氏の指摘に肯ける側面もある。だが、記憶の痕跡を積極的に用いることが祝福になるのか、という疑問も生じる。例えば、現在ベルリンではヒトラーによって建設されたスタジアムの再生工事が進んでいるが、それをもってナチスを祝福しているとは言えない。

建築はモノであり痕跡であるため、悪しき記憶を背負っていたとしても、転用という形で思想を超えて他のものになり得る可能性を備えている。そしてそここそ過去の出来事が未来の「他者」に開かれる余地がある。ましてライヒスタークの改築では「帝国」時代の復元ではなく、新たなドームがデザインされている。かつての「帝国」の意味はズラされており、むしろ負の痕跡の上に新たな創造を加える方法が興味深い。国家的象徴を担う建物を再生したからといって「帝国」やナショナリズム批判からのみ評価できる代物ではない。表現に対するより繊細な検討が必要だろう。

一方ポーランドでは、オシフィエンチムとクラクフ、ワルシャワの街を訪ねた。ツアー共通の見学として、オシフィエンチムでは「国立オシフィエンチム博物館 アウシュヴィッツ＝ビルケナウ」、クラクフでは旧市街地、ワルシャワでは旧市街地やワルシャワ蜂起記念碑などを訪れた。

さらに個人的に、クラクフでユダヤ人街とシナゴグ、ワルシャワで文化科学宮を訪れた。

「アウシュビッツ」は、言葉を発することすら拒まれるような場所だった。ナチス撤退の際に爆破された「ガス室」はそのまま放置してある。修繕や復元が政治に関わるからだという。痕跡に触れることさえ不可能な場所である。そして過去の、想像を絶する、最も遠い出来事の生々しい痕跡が、この目の前にあるという不気味さ。それは「遠さ」と「近さ」に引き裂かれるような不気味さであった。

一方ワルシャワは社会主義時代を色濃く残した都市であった。駅前にはスターリン時代の1950年代に建てられた、いわゆる「社会主義リアリズム」様式の巨大な文化科学宮が聳え立つ。大衆の「趣味」を反映したと言いながら、その「趣味」は巨大でキッチュな古典主義様式に還元された抑圧的なデザインである。そしてそのすぐ横には労働者のための集合住宅が建ち並んでいた。絵に描いたような社会主義の都市のあり方だ。だが街全体としては、ベルリンとは異なり、未だ社会主義の記憶から十分に距離を取ることはできていないように見えた。

ベルリン、ポーランドともに、負の記憶や痕跡への関わり方の難しさ、あるいはその表現の難しさを見せていた。しかし、その困難さそのものに意識的に向き合いながら記憶を表現し、伝えようとしていたのが印象的である。神戸では記憶の表現の困難さそのものに向き合っているだろうか。そう思う時、ただ憂鬱な気分にはさせられるのは私だけではないだろう。

(京都工芸繊維大学助手、建築史・都市史)

運命の記録者

— 10年目の「ショアー」／チェルニアコフ日記を読む —

寺田 匡宏

神戸でクロード・ランズマン監督の映画「ショアー」が上映されたのは1995年秋のことであった。

95年の秋といえば、地震からすでに季節がふたまわりしたころ。倒壊し、あっというまに撤去されてしまった阪神高速の上のぽっかり空いた青空に、何事もなかったようにふたたび橋脚がのび始めていたちょうどそのおなじ時に、ドイツ第3帝国によるユダヤ人虐殺という表象不可能性そのものである出来事、あるいは何事もなかったように隠されてしまった証言不可能な出来事の、その「なかったかのように」を作り出すメカニズムに40年後にインタビュー形式で執拗に迫った9時間半の映画が上映されていた。

それから8年。

昨秋、ベルリン／ポーランドに旅行した。メンバーは、建築史の笠原一人や社会学の山本唯人、映像プロデューサー早乙女愛、詩人季村敏夫など約10人。カイコ棚のような夜行列車を乗り継ぎ、路線バスに揺られ、アウシュビッツを最終目的とした旅は、必然的に「ショアー」に帰するものとなった。

なかでも旅を通じてクローズアップされてきたのが、ショアー「第2部」である。

「ショアー」はさきほどのべたように9時間半にわたる長編のドキュメンタリー映画だが、大きく第1部と第2部に分かれている。第1部は、主にアウシュビッツやトレ布林カへの移送と収容所

内の絶滅の問題を扱い、第2部は収容所内での蜂起、ワルシャワゲットーにおける蜂起を扱う。

これまではおもに第1部が中心に取り上げられてきた。シモン・スレブニクの歌声、あるいはポーランド機関車の運転士が移送されるユダヤ人たちに向かって見せたという首をかき切るしぐさは忘れがたい。しかし、この映画は第1部と第2部がセットになっている映画である。アウシュビッツの瓦礫の上を、そしてワルシャワの石畳を歩くことによって、ショアー「第2部」の持つ問題が明らかになってきた。今回はそれを報告したい。

「ショアー」第2部の主人公はチェルニアコフである。

断定的にいってしまえば、これを発見するために今回のベルリン／ポーランドの旅は準備し設定されていたといってもよいくらい、今回の旅の結論のアルファでありオメガはチェルニアコフである。

チェルニアコフとは誰か。

アダム・チェルニアコフ。1880年ワルシャワに生まれ、1942年ワルシャワに死ぬ。公式的にはワルシャワゲットーにおけるユダヤ人評議会の議長、ゲットーの最後の日々の記録者であり、ナチスによる移送の開始の翌日に、すなわちゲットーの最期の開始の次の日にその行く末を見届けることを拒否して自ら死を望んだ意志の人である。

ナチスのユダヤ人絶滅政策の犠牲と

なったユダヤ人は500万人とも600万人ともいわれているが、よく知られているように、そのうちの多くが東ヨーロッパのユダヤ人であった。中でもポーランドには330万人のユダヤ人が住んでいたといわれ、これはポーランド人口3300万人の実に10%、10人に1人がユダヤ人であったことになる。ワルシャワについてだけでみてもおよそ40万人のユダヤ人がいた。当時このポーランドの首都の人口は136万人であるから、ここでは町の人のおよそ3分の1がユダヤ人であったことになる。

ワルシャワのユダヤ人がその過酷な運命に投げ込まれたのは1939年9月1日、ナチスドイツが、ヴィスワ川河口の自由都市ダンツィヒを奇襲攻撃してポーランドに攻め込んで以来である。

年表的に言うと、9月1日、ドイツ軍、ポーランドに侵攻、9月3日、英仏、ドイツに宣戦布告、9月17日、ソ連軍、ポーランドに侵入、9月28日、独ソ国境友好条約調印、ポーランド分割、10月12日、ポーランド東部に総督府設置、ヴァルテラント、西プロイセンはドイツに併合。

この過程は「電撃作戦」といわれているが、まさに電撃的にナチスはポーランドを攻略し、支配下に置き、ユダヤ人もその中に巻き込まれる。ゲシュタポはユダヤ人をいわば間接統治しようとしており、その過程でユダヤ人共同体の中にその指導者からなる評議会を作り、彼らにカッコ付きの自治を行わせようとした。

チェルニアコフは、その評議会議長に選ばれる。

だが、チェルニアコフは、議長に指名される9月23日から日記を付けはじめたのではない。彼の日記は、ドイツ軍がワルシャワにひしひしと迫りつつある9月6日から書き起こされている。このとき、彼はまだ、ワルシャワゲットーの評議会議

長でも何でもない一介の市会議員にすぎない。にもかかわらず、彼は、まるで、その後、自らがワルシャワゲットーとともに命運をともにすることを予測するかのよう、小さな手帳に一日の出来事をつづり始めるのだ。そして、事実、その日記の記述はほぼとぎれることなく、彼の死の数時間前まで続く。

1939年9月6日 深夜に目が覚めて5時まで眠れず。

1939年11月20日 9時に就寝、2時に目が覚める。胸騒ぎがして眠れず。起床した5時か6時まで続く。

チェルニアコフの睡眠は断続的である。夜中に目が覚めてそのまま朝方を迎えることも多い。

自作のソネットを妻にときおり朗読する彼は詩人であり、化学者でもあった。ドイツ軍の空襲に脅かされる夜、あるいは銃声のひびきわたる払暁、外出が禁止されて死だけが支配する闇の中で、骨と皮の物乞いの子供たちの幻影に脅かされながら、石炭が切れ、時に零下数十度に下がる部屋で、彼を支えたのは「ドン・キホーテ」だった。

爆撃が続き、ラジオからは「リネンの包帯を各家庭は用意してください」と放送が流れるある日、彼はそれに続けてこんな一節を、その小説から引用する。(1939年9月11日)

いざ出陣となると、兵士たちは頭に、木綿で作った房飾りをつけてもらう。これはおそらく銃弾が頭に穴をあけたり、腕や足を台無しにしたりするであろう銃創の手当のための包帯代わりなのだ。

包帯の用意すらなく、いわんや手当し

てくれる者すらなく、頭に付けたささやかな木綿の布きれで、痛みをこらえながら自らの傷を手当しなくてはならないじめな兵士たち。もしかしたら、それが自分の死装束になるかも知れないのに、そんなものを彼らは頭の上に、何かの目印のようにぶら下げてゆかなくてはならない。チェルニアコフの目には、それがワルシャワのゲットーで、世界のどこからの助けもなく、自らが自らの死の準備に駆り立てられつつあるユダヤ民族の行く末の予感にオーバーラップしていた。

歴史家ラウル・ヒルバーグはチェルニアコフ日記に流れる感覚を称して「奇妙なイロニー」と表現している。

たしかに、あの悲嘆の最中に「ドン・キホーテ」とは奇妙と言えは奇妙である。しかし、イロニーとは、現実の苦悩を背景としながらも、現実を越えつつ、しかし同時に現実深くコミットすることである。ドン・キホーテとは、言うまでもなく、スペイン、アンダルシア、ラマンチャの大地で風車に向かって突進した騎士である。眼前に展開しているのはドイツ軍である。しかし、それはじつはドイツ軍なのではない。そのような形を取ったなにか得体の知れない歴史の巨大な動きでもある。現実があまりに過酷なものであるとき、現実を越えようとしたら、もはやそこに動員されうるものはイロニーしかありえないのであろう。

あらゆる叙事詩の主人公がそうであるように、巨大すぎる運命にとらえられた

とき、人はただそれを見ることしかできない。運命は、襲いかかるだけである。「見るべきものはすべて見つ」、記録者は、そういつて歴史をただただひたすら見つめ続け、そして記録し続ける。そして、そのことによって、彼は運命に抗う。

チェルニアコフ日記を読む我々は、そこに歴史と運命の真正面に投げ出されてしまった男の姿を発見する。

2005年、神戸は震災10年を迎えるが、それは「ショアー」10年でもある。

あの震災後の神戸での「ショアー」上映、それは戦火のサラエボでの「ゴドーを待ちながら」を思い起こさせたという証言がある。また「ショアー」の最終カットがスクリーンに流れたとき、沈黙が会場を支配し、いいしれぬ感動がその場に流れたとも言う。

震災という巨大な出来事が神戸を襲ったとき、映画の中では、あまりに巨大な出来事にとらえられ、それを直視し続けざるをえなかった記録者の姿が映し出されていた。

1995年が震災の年でもあり、そして日本における「ショアー」公開の年でもあったことの意味は問い続けられなくてはならない。

※ *The Warsaw Diary of Adam Czerniakow*, edited by Raul Hilberg, Stanislaw Staron, and Josef Kermisz, Stein and Day, NY, 1982.

※「ドン・キホーテ」は岩波文庫牛島信明訳を参考にした。

(国立歴史民俗博物館研究員)

書籍紹介②

『現代民俗誌の地平3 記憶』（岩本通弥編、朝倉書店、2003年10月発行）新たな民俗誌の創造と「より動態的で、本質的な民俗学的記憶論」を模索するべく編まれた一冊。蘇理剛志さんの「阪神・淡路大震災と慰霊 ―「震災モニュメント」以前」という論考が掲載されています。『木を抱く』（木内寛子著、ドット・ウィザード、2004年2月発行）著者の最新詩集。27編の作品が収められている。＜書店でお求めになれない場合はアーカイブまでご連絡ください＞

8年半後の神戸へ

—「知らなくてごめんなさい」の気持ちと—

橋本 京子

—忘れていた。知らなかった。知ろうとしなかった。ごめんなさい。ごめんなさい。

それが、震災後8年半経った神戸を訪れての、私の想いの全てであるように思う。

私自身は、震災でほとんど被害を受けていない。そして、震災直後に神戸を訪れる勇気もなかった。ただ、私自身が、震災ではないが「思い出したくないが、忘れたくない」(1)ことを抱えていることから、無意識のうちにそれに重ね合わせて震災を捉えていた。震災は忘れてしまいたいものを含みながらも、忘れられない出来事で、何かを残さずにはいられない出来事であると思い、気になっていた。

2003年春、朝日新聞の記事で「震災・まちのアーカイブ」の存在を知った。なぜか私の心に残る記事だった。この方々と話をしてみたいと思った。そして夏に、事務所を訪れた(2)。神戸市内のある街を歩いたり、長田の電柱に触ったり、須磨海岸を歩いたりもした。もはや、改めてそう言われなければ、震災のあった街だと私は気づかない。私は今まで気づかなかった。しかし、確かに震災はあったのだ。私は今までそれを知らなかったし、知ろうとしなかった。それが申し訳なくてならなかった。

私は今の神戸から何かを感じ取りたいと思っている。私の眼も耳も鼻も手も足も全部、全身を使って神戸に向き合いたいと思っている。なぜ何のためにそうしようとしているのか、今はわからない。わからないまま、時々ふらりと事務所を訪れている。資料を開く勇気もないままに。

2003年11月14日、記

(1) 蘇理剛志氏の言葉を引用させて頂きました(「瓦版なまず」第14号、p.07)

(2) 私が事務所を訪れるきっかけをつくって下さった菅祥明氏に深く感謝いたします。

(社会心理学、人格心理学)

保存態勢の整備について

アーカイブでは資料の保存態勢を見直してきました。この度、中性紙の文書箱(内寸 470×350×250mm)20個を購入しました。これまでは茶封筒に一次資料を入れ、段ボールで保存したり開架の状態にしていたましたが、年月の経過とともに印字のかすれなどが発生してきました。とくにFAXの用紙や蛍光ペンによる書き込みなどは判読しづらいものもあります。文書箱とともに今後は中性紙の封筒も購入して、より安全な保存態勢を構築する予定です。

(編)

「震災・まちのアーカイブ」2003 年度活動日誌抄

- 2003 年 4 月 5 日(土) 2002 年度の会計報告を行う。新年度の活動について意見交換。
- 4 月 24 日(木) 毎日新聞大阪社会事業団から 2003 年度助成団体に選出される。
- 5 月 8 日(木) 5 周年記念刊行物に掲載の「中央区ボランティア」資料の記述目録デジタル化について意見交換。
- 5 月 17 日(土) 辰巳大輔さんの案内で高槻市立しろあと歴史館を見学。夜、懇親会。
- 6 月 5 日(木)「瓦版なまず」第 15 号発行。
- 6 月 9 日(月) 神戸学院大学の水本浩典さんと学生 3 名が来室。神戸市立鷹取中学校避難所資料の共同調査について意見交換。
- 6 月 19 日(木) 神戸学院大学生 3 名と鷹取中にて避難所資料の調査・点検を行う。
- 7 月 1 日(火) 菅、神戸学院大学地域研究センター「避難所研究会」にて聞き取りに関する報告を行う。
- 7 月 12 日(土) ㈱エイチ・エス写真技術の中南利男さんと所蔵資料のデジタル化の件で打ち合せ。毎日新聞社野田武さん来室。
- 7 月 19 日(土) 国立歴史民俗博物館主催のフォーラム「新しい世紀の災害論」に参加（於・東京ヤマハホール）。
- 7 月 20 日(日) 国立歴史民俗博物館「ドキュメント災害史 1703 - 2003 地震・噴火・津波、そして復興」展を寺田匡宏さんの案内で見学する。
- 7 月 26 日(土) 被災地 NGO 協働センター鈴木隆太さんがインタビューのため来室。
- 8 月 2 日(土) 熊本大学のハッ塚一郎さんが資料調査のため来室。
- 8 月 21 日(木)「灘区ボランティア」資料の詳細目録の作成を開始。
- 9 月 18 日(木) 成田空港地域共生委員会「歴史伝承部会」より 6 名来室。現代資料の保存と活用について意見交換。
- 9 月 23 日(火) 季村・菅、「人と防災未来センター」で開催の震災資料に関する研究会に参加。菅、「デジタル化の実務と実際」について報告。
- 10 月 16 日(木) アーカイブ 5 周年記念刊行物『アーカイブ前史』を発行。
- 10 月 25 日(土)「瓦版なまず」号外発行。「アーカイブ前史」の発送と書店への納品。
- 10 月 30 日(木)「中央区ボランティア資料」の活字版作成。神戸大学震災文庫、尼崎市立地域研究史料館へ納める。
- 11 月 20 日(木) 日本経済新聞社諸岡良宣さんが取材のため来室。㈱エイチ・エス写真技術の中南利男さん来室。
- 12 月 4 日(木) NHK 反町聡さんが番組制作に関連して来室。
- 12 月 20 日(土) 東通企画山東寿海さんが取材のため来室。
- 2004 年 1 月 15 日(木) 神戸新聞社中井雅史さんが取材のため来室。
- 1 月 24 日(土) 神戸新聞社西栄一さんが取材のため来室。鷹取中と中央区ボランティアセンターの資料整理について意見交換。
- 2 月 19 日(木) 来年度の活動についての意見交換。
- 3 月 3 日(木)「瓦版なまず」第 16 号編集会議。2003 年度会計報告作成。
- 3 月 18 日(木)「瓦版なまず」第 16 号原稿の校正、発送の準備。
- 3 月 27 日(土)「瓦版なまず」第 16 号の発行。

2003年度 震災・まちのアーカイブ会計報告

(2003年4月1日～2004年3月16日)

単位：円

収 入	
前年度繰越金	186,678
銀行利息	1
CD-ROM, ブックレット売上げ	89,700
賛助会費およびカンパ	135,870
雑収入	800
助成金	300,000
小 計	713,049
支 出	
パソコンソフト購入費	31,140
研修参加費	50,000
ブックレット、CD-ROM制作費	228,900
資料作成代	7,421
複写機借料	32,433
交通費・通信費	52,220
事務消耗品	65,655
書籍代	7,445
文書箱購入費	44,100
雑支出	1,680
小 計	520,994
次年度繰越金	192,055

以 上

◇2003年度に賛助会費・カンパをくださった方々(敬称略、50音順)◇

相川陽一 岩崎信彦 大門正克 大国正美 大谷渡 岸桂子 橋川真一 栗原彬 梶原正美
河合房子 関西国際大学メディアセンター 小山仁示 佐賀朝 佐野京子 芝村篤樹
すみとも正成 田中はるみ 田原優子 塚崎昌之 辻川敦 鶴田守人 中山美恵子
西畑康次 萩原彰二 橋本京子 波多野ゆき枝 日比野正代 藤原直子 三上裕 水本浩典
道場親信 安見美抄子 山中敏夫 山本唯人 山本正和 若原キヌコ 渡邊仁 匿名希望
—ご支援ありがとうございました—

『アーカイブ前史』

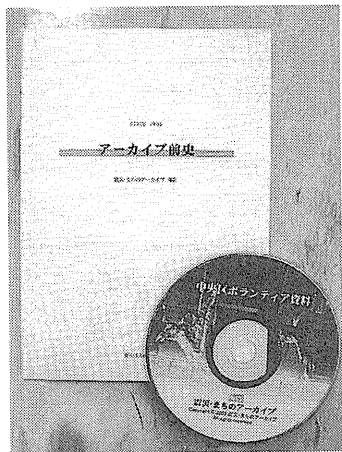
震災・まちのアーカイブでは設立5周年記念の刊行物として昨年10月に『アーカイブ前史』を発行した。

『アーカイブ前史』の本文篇では、アーカイブの前身団体である「震災・活動記録室」の設立に至る経緯を、現在は「市民活動センター神戸」で活動されている実吉威氏へのインタビューから解き明かしている。そこでは、震災に関するさまざまな資料（震災資料）が、実吉氏をはじめとするボランティアによってその散逸を防ぐ取り組みが始められた事実を示している。資料の収集や保存に関して専門家ではない学生や主婦たちがいかなる状況のもとで活動を行なったのかについて、実吉氏とインタビューである佐々木和子氏とのダイアログから紐解くこととなった。

さらに、アーカイブなどが所蔵する「中央区ボランティア資料」を「記述目録」という新たな手法を採り入れて目録化している。「記述目録」とは資料の来歴や構造を明示する目録であり、その作成過程において中央区ボランティアセンター（神戸市中央区）にも関連する資料が保管されていることが判明した。三宮や北野など神戸でも

最大の繁華街を抱える中央区で、被災者支援や多言語のミニコミ発行などを続けた「中央区ボランティア」の実像が今回の試みを通じて明らかになることを期待している。

そして『アーカイブ前史』の巻末には1枚のCD-ROMが綴じこまれている。その中には「中央区ボランティア資料」に関する一連の目録や彼らが発行したミニコミ（「なんでもかわら版」）をデジタル化して納めてある



現在から過去を振り返るとき、冷厳な視線はその中に稚拙さや矛盾を見出すかもしれない。主にアーカイブ誕生前夜までを辿った『アーカイブ前史』からも、資料の取り扱いをめぐる混沌とした内情を読者は見出すだろう。けれども編者たる私に关していうならば、もちろん過去を裁く者としてではなく、

同書に登場する彼ら／彼女ら、あるいは名をのこすこともなく去った、アーカイブの系譜の一方の先端にたたずむ人たちへ敬意と愛惜の念を込めて制作に当たったつもりである。余糧くすぶる中をボランティアが駆けまわっていた頃、私は避難所でうずくまっていた。だからというわけでもないが、遅れてやって来た若者が震災という「終わらない過去」に触れようとするとき、それもひとつの態度として許されると思うのだ。（『アーカイブ前史』A5判・50頁 CD-ROM付）

（編集部・菅 祥明）

藤原 直子

季村 範江

「ボランティアをするうえで大切なことは、活動した内容についてシビアな自己評価を下すこと。そして、そこで得たことをいかに社会にフィードバックさせるか」。これは以前、国内外で豊富なボランティア経験を持つ方から伺った話である。『アーカイブ前史』を編むにあたり、この二つのことを図らずも果たせたかと思う。インタビューによるアーカイブの前身である「震災・活動記録室」の活動の洗い直し。また、記述目録により資料の背景・経緯を明らかにし、CD-ROMという形を得て資料を広く世に出せたこと。こうしてフィードバックされたものが、これからどのように活用されていくのか、非常に興味のあるところだ。

(震災・まちのアーカイブ会員)

一次資料は、資料に書かれている言葉と、文字で書かれてはいないが資料自体が語る言葉の、ふたつを持っていると思う。

今回のCD-ROM制作は、資料をビジュアルに提示することで、ふたつとも表現できる可能性を教えてくれた。CD-ROMをある目的で編集するのでなく、資料が持っている言葉の多様性を表現すれば、そこから何を読み取るかは見る側にゆだねたらいいいのではないだろうか。

資料のCD-ROM化が進むにつれ、資料に関心を寄せる人も増え、そのことが新しいアーカイブや資料館の出現につながってゆくのではないかと期待している。

(震災・まちのアーカイブ会員)

『アーカイブ前史』に想う

『アーカイブ前史』に想う

市村 登和

ハッ塚 一郎

記録室時代の写真や、実吉さんの言葉一つ一つに、「そうだったなあ」と記憶を新たにしました。自分が関わった活動でもこの有様です。自分のやったことや、そこで得た想いの数々を、自分以外の誰かが分かちもってくれ、この世に留めてくれるということ。この点に、資料保存活動の、かけがえのない意義があるのだなと、身をもって実感しました。過去を振り返るだけでなく、同時に、現在の自分を刺激し、変化させる力をも、記録資料は持っているのだと思います。CD-ROMという新手の媒体が、さらに多くの人々に、新しい刺激を与えますように。

(熊本大学教育学部講師/社会心理学)

記述目録をCDに置き、デジタル化すること。ISAD(G)を使つての目録作成を試みたこと。

小さな組織なりの方法で、ISAD(G)を活用することができる、ということを提示した事は、意義のあることだったのでないか。特に、一覧形式で全体を見せつつ写真リンクをする、という方法は、2次元に終始する目録に、立体感を示した、という点で新しい。また、ファイルの一覧に下位のアイテムの目録リンクをつけることで、目前のファイルを開くような、現物に当たっているときの感覚に近づけることができたのではないかと、思っている。

(震災・まちのアーカイブ会員)

※ ISAD(G) = 「国際標準記録史料記述 一般原則」

－会員募集のお知らせ－

「震災・まちのアーカイブ」は本年3月で設立6周年を迎えました。地震により全壊した金属加工会社の跡地に事務所を置き、震災一次資料の収集・整理・保存とその公開を行なっています。所蔵資料の多くは、ボランティアが被災地に残したかつての活動記録です。日々の活動の中では震災とそこから立ち現れた「記憶」と「記録」をめぐる様々な問題についての議論も続けています。震災一次資料に関心をお持ちの方は、ぜひご参加ください。

賛助会員を随時募集しています。賛助会員の方には、「瓦版なまず」、『なまずブックレット』等の各種刊行物をお送りし、研究会の案内もお届けします。所蔵資料の閲覧も行なっただけです。年会費は1口1000円。振り込みは、郵便振替00920-2-125759、「震災・まちのアーカイブ」までお願いします。

掲 示 板

『アーカイブ前史』の入手方法について

『アーカイブ前史』をお求めになる場合は、アーカイブの事務所へ電話・FAX・電子メールのいずれかの方法でご連絡ください。もしくは上記の口座番号をご参考の上、郵便振替の用紙に「アーカイブ前史希望」と明記して必要金額をお振込みください。定価は1000円（税込み）。送料は、購入冊数が1冊の場合は240円、2～3冊の場合は390円となります。希望冊数を忘れずにご記入ください。（事務局より）

「灘ボラ資料作業ノート」

現在は「灘区ボランティア資料」の詳細目録作成が活動の中心です。「中央区」と同じように資料や目録のデジタル化を念頭に置いています。目録をとる際にも検討すべき事柄が出てくるのですが、今回は「灘ボラ資料作業ノート」を作り、担当者が日々気付いたことを記すようにしています。「灘ボラ」についてはいずれ作業の進み具合をご紹介します予定です。（灘ボラ作業班より）

編集後記 ■表紙写真はJR神戸線の兵庫駅2番ホーム。大阪方面行き終電は24時31分発。ホームでそれ待つ間に1番線を貨物や夜行列車が通り過ぎていく。終電のしずかな車内も三ノ宮駅で多くの乗客を吸い込むと日付が変わっていることを忘れさせるほど、にぎわう。その横で互版のゲラに目を通す。都市はそうして、いつも、夜を深めていく■発行がずいぶんと遅れてしまいました。執筆者の皆さまにはご迷惑をおかけしました■5周年の企画で奔走しているうちにこの3月で6周年を迎えていました。これからもご支援をよろしくお願いします。（S）

「瓦版なまず」第16号 2004年3月27日発行

発行人 季村 範江 編集人 菅 祥明

震災・まちのアーカイブ

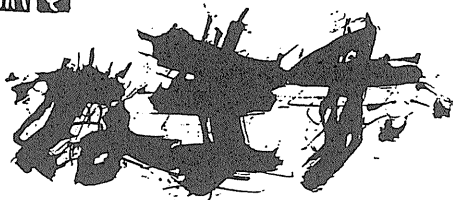
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町1-11-4 神港金属㈱内

TEL 078-681-6231 FAX 078-681-6232 E-mail archives_kobe@nifty.com

URL http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/

2004-11-20

17



Kawaraban-namazu



瓦版なまず 第17号

編集部：季村敏夫

市村登和

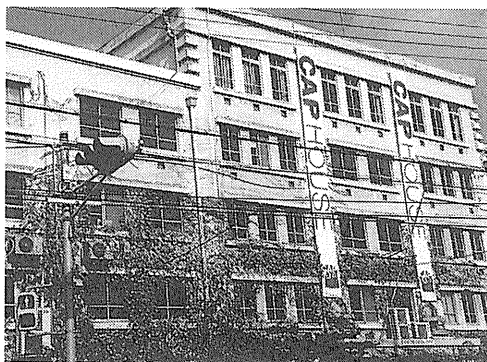
発行人：季村範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 神港金金属(株)内 Phone:078-681-6231 FAX:078-681-6232

URL: http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/ mail to: archives_kobe@nifty.com

【阪神大震災・記憶のく分有>のためのミュージアム構想 | 展 展示会場】



【一九三〇年三月八日。神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。三ノ宮駅から山ノ手に向う赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車が駆け上がって行く。それは殆ど絶え間もなく後から後からと続く行列である。この道が丘につき当たって行き詰まったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。後に赤松の丘を負い、右手は贅沢な尖塔をもったトア・ホテルに続き、左は黒く汚い細民街に連なるこの丘のうえの是が「国立海外移民收容所」である。】満州事変勃発前夜（昭和五年）の「CAP HOUSE」の姿である。石川達三著『蒼氓』（第一回芥川賞受賞）の冒頭部から引いてみた。絶え間なく降る春の雨。坂道。泥濘。細民街。今やその面影はほとんどないが、このあたりには昭和の戦争期の記憶が息づいている。尖塔のあるトア・ホテル（中山手通2丁目108）は、妻子を東京に残して神戸へ移った俳人西東三鬼が利用していた。東側には、シリーズ「流氓ユダヤ」を撮影した安井伸治らの眼を釘付けにさせた亡命ユダヤ人の滞在先、ユダヤ人協会（山本通2丁目）がある。

展示によせて

季村範江

「someday, for somebody いつかの、だれかに 阪神大震災・記憶の＜分有＞のためのミュージアム構想」展 2005 冬神戸」が、2005 年 1 月 14 日（金）から 23 日（日）まで、CAP HOUSE（神戸市中央区）で、「記憶・歴史・表現」フォーラム主催で開催されます。

「震災・まちのアーカイブ」は共催団体として、震災一次資料を展示することになりました。民間アーカイブと、多元的な記憶をどう伝えるかを模索する若い研究者達が共同で、従来とは違った資料の展示を試みます。

タイトルは「棚へー＜未来＞の配達のためにー」。資料は過去から未来に手渡されてゆくものとして、封筒に入れられています。現物ではなく複製です。震災当初活動したボランティアの連絡ノート、活動報告書、アンケート類、手記、チラシ、ミニコミ、インタビューしたテープなどです。1995 年 1 月 17 日、この地で何が起こったのか、人びとは何を思い過ごしてきたのか、さまざまな思いの痕跡が詰まった封筒です。

来場者は封筒を手に取り、触れ、読み、テープの声を聞くことが出来ます。もちろん、アーカイブにある全てを見ることは出来ません。プライバシーに関わるものは、あらかじめ省いています。

集めたというより集まってきた震災一次資料は、いま「震災・まちのアーカイブ」という棚の場所にあります。人から人へと伝わり、「震災・まちのアーカイブ」にやって来ました。その時、その場面において、呼びとめられた人が現れ、役目を終えて去ってゆきました。

わたし達も呼び寄せられて集まり、活動を始めました。2002 年 2 月、メンバーから「記録・歴史・表現フォーラム」という新たな流れが生まれ、若い彼らの活動がこの度の展示へつながりました。今回の展示は、さまざまな専門分野の研究者と土地に住む主婦や勤め人の出会いによる画期的な試みです。

いつの日か、わたし達も誰かに委ねて役割を終え、この場から退場することになるでしょう。

準備をしている間にも、各地で次々と災害が起きています。先日発生した新潟県中越地震の惨状は 10 年前の神戸の光景と重なり心が痛みます。災害当初必要なのは、一日も早いライフラインの復興であり、生活の建て直し、苦しむ人のケアです。やがて、そこでなにがあったのか、出来事を伝えてゆこうという動きが、かの地にも必ず現れるであろうことを信じています。

【展示作品】一部紹介

「棚へー〈未来〉の配達のためにー」震災・まちのアーカイブ＋笠原一人 託された震災一次資料の展示

「慶ちゃんのこと」蘇理剛志

1995. 1. 17、亡くなった弟の痕跡の収集

展示に至るまで一資料の熱

藤原 直子

震災・活動記録室の活動から離れて二年目の春、私は再び資料の元に戻った。震災・まちのアーカイブの事務所を訪ねると、それは当時のままの姿でキャビネットに納められていた。記録室で見なれていたはずなのに、その姿に圧倒され息をのんだ。その量的な存在感もさることながら、私を圧倒したのは資料が発する、変わることのない熱だった。

一九九五年三月、現場に視点を据えたボランティアの記録を残そうと記録室は発足した。功績や美談を伝えるものではなく、ボランティアが抱えていた問題や失敗、日々のつづきなど、ありのままの活動を伝える記録を後世に残そうと、記録室は被災地のボランティアに呼びかけた。被災地からの撤退とともに散逸するであろう貴重な一次資料を、ボランティアはその呼びかけに応じ、記録室へと寄せた。「すべてのボランティアの活動は、社会から何らかの形で提供を受け行う公益活動である。活動したことを記録し評価することは、社会責任である。すぐに記録や評価ができなくても、後世の人が判断・評価するための材料だけでも提供しなくてはならない。それが記録を残すということの社会的意義だと思う」と、記録室の母体であった地元NGO救援連絡会議で事務局長を務めた中田豊一さんは語っている。そのことを、被災地のボランティアは、よく承知していたのだと思う。自分たちの活動を判断・評価してもらふ材料として、その記録を後世に残す責務のあることを。

それを受けた記録室は、資料の整理・保存に関す

る話し合いを、幾度となく繰り返した。目録作りの手法、保存先の模索、そして大きな壁となったのがプライバシーの問題であった。公開・非公開の線引きをどのようにするのか、その答えを求め混沌とした状態が続いた。発足当初から被災市民の団体と机を並べ、そのうめきのような声を聞き、現場のボランティアの話しを聞き続けてきた記録室。メンバーの中から、その声を聞き、次々と問題が噴出する現場の活動へと移って行く者、その混沌に耐えきれず記録室から離れて行く者が出た。行き詰まった記録室に、被災地の真中で議論をするより、外に出てみよとの他者からの助言。記録室の活動は以降、混沌から離れ、被災者支援へと重点が置かれることとなった。しかし、被災地のボランティアが、後世のために残した資料の存在は、重いものだった。

そして、アーカイブに引き継がれたものたちが今、私に問いかける。震災後、被災地から電車で数十分の大阪に着くと、何も変わらぬ街の喧騒に驚いたものだ。あれから十年近く経ち、被災地の街は美しく整えられはしたけれど、人々の気持ちはあの時感じた、奇妙な虚無感と変わらないままではないのか。語られることのない、胸にこびりついた記憶をもって日々暮す人々のことを、後世のためにと、自らの活動の跡を残して行ったボランティアたちのことを、苦い思いをもって去った記録室の仲間たちのことを、忘れるなど。一次資料を手にとると、大きな災難と共に生きた人々の声が聞こえる。その声が熱となって今もなお、私を圧倒し続けるのだ。

展示に向かって－K さんへ

市村 登和

霜月に入ってもピリッとした寒さにならず、穏やかな毎が続いています。その後、体調はいかがですか。最近の活動日は、ボランティア活動の団体ごとに分けられている茶封筒を棚から取り出し、茶封筒の中に入っている 1 枚 1 枚が目録に書かれている内容と一致しているか、再確認する作業を続けています。地震直後の被災地でのボランティアの活動つまり自主的な活動の記録が、震災・まちのアーカイブという私的な集まりが続ける場で残って 10 年を迎え、【記憶・歴史・表現】フォーラムという自発的な集まりの場で開かれる。すべての過程において、その筋のお達しや旗振りでないことが、小気味好いところです。

目録を辿っていると、K さんたちが、ボランティアの記録をなんとか残していこうとしていた頃の様が浮かびます。遅れてきた私は、その様は、私の中で巡らすことでしか、心を寄せてみることもしかできないのですが、今、こうして、例えば、当時に作られた目録で作業することができる、ということが、K さんたちの積み重ねで可能になっていることを実感するに至って、私も、私が受け取ったものを自分がある限り投げ出さないことで、資料を介して、初期のボランティア活動の記録を残す活動をしていた皆さんの思いにつながっているのかな、と思います。そして、私が感じるように、これから遅れてこの記録に関わってくる人たちに、今度は私の営為も包含して伝わることを信じていたいと思います。信じていても、ほんの先の時間でも手が届かないことも有り得るのですが。

ところで、ご存じの通り、テープを除けば残されている多くは、チラシとかミニコミなどを作ったボランティア活動をしていた団体が、文字で表した、物、人、そして事柄の記録です。書き表わし示されなかったことも含めて、一旦閉じ込められた二次元の世界に、私たちが、震災・まちのアーカイブが、向き合ったのだ、ということも、合わせて記憶されるものなのでしょうか。

寒い最中に、坂道を上ることにはなりますが、作品となった震災一次資料の様子をご覧に CAP HOUSE へ足を運んでいただけたらと思い、この手紙を送ります。展示では、茶封筒から新しい仕立ての姿で作品に混じることになりますが、K さんにも、かの地で再び手に取ってご覧いただければ、嬉しい限りです。色々お話できることも楽しみに。もちろん、それまでに事務所で会えるのも嬉しいですね。どうぞお身体をご自愛くださいますようお願いいたします。

【報告】灘ボランティア一次資料の整理状況

CD-ROM 制作をめざし、昨夏から始めた灘ボランティア資料の詳細目録をとる作業もあとわずかとなった。ダンボール 3 箱に納められた資料はファイル、ノート等比較的整理され、保存状態も良好であった。当初から記録を残すという意識があったことを感じさせる資料群であった。これらを中性紙箱に移し、資料保存の環境を整える作業も一方で進めている段階である。(藤原直子)

だれのためでもない ——

「someday, for somebody いつかの、だれかに」展によせて

寺田匡宏

記憶はだれのためにあるのだろうか。

もちろんわたしの記憶はわたしのものではあろう。だが、わたしはわたしの記憶をわたしのものとは思えず、そのことをわたし以外の人にも伝えようとする。わたしはいま、ここでこのようにして、ことばをつづっている。まずは、このことばは、これを依頼してくれた人、そして編集してくれる人に宛ててつづられ、最終的には、この小冊子を手にして文章を読んでもらっているだろうあなたのためにつづられている。だが、とはいうものの、わたしは、いまこの文章を読んでいるあなたがだれだか知ることはできないし、あなたがいまこれを書いているわたしにアクセスすることもできない。この文を読んでいるあなたは、いつのあなただろうか。そのとき、わたしはどこでどうしているのだろうか。

【道の左手には、野生のカノコユリが他のどこにも見られないような仕方咲き、右手にはカブラギキョウが生えている。ほど遠くないところには、まぶしいばかりのナデシコが生えている… きみのためにあるのでも、私のためにあるのでもない言葉。——なぜか。それは、大地はだれのために生まれたのか、こう私はたずねたいのだが、それはきみのためでも私のためでもない、と思うからだ。——永遠の言葉、<私>も<きみ>もない言葉、<彼>でしかない、<それ>でしかない言葉。わかるかい、それだけがあるのだ。それですべてなのだ。】

パウル・ツェラン「山中対話」のこの一節を指して、エマニュエル・レヴィナスは、純粋な接触、純粋なふれあいの瞬間を描いているといっている。ここで述べられているのは言語の純粋な形態としての詩についてである。それをレヴィナスはソクラテス以前の哲学者がいうピュシス（自然）のようなかがやきという。ピュシスとは、息が肺から吹き出る音から来た単語だそうだが、だれのためにあるのでもない大地と同じように、だれのためにあるのでもないことばもあるのだ。

ビデオカメラで1万年にわたってアルプスの山並みを撮り続けていたとする。すると、それを早回しで見たとき、山はあたかも生きもののよう見え、一方、そのときそこに写し出される人間や動物はブラウン運動をする粒子にしか見えないという。ブラウン運動には、規則性も意味もない。その偶然性に支配された世界で、わたしたちはことばを吐き、記憶を伝えようとする。よく考えてみれば、そんな世界で、わたしがわたしの記憶をあなたに伝えることができること、それは奇跡的なことなのだ。出会うはずのないものが出会うべくして出会い、そして記憶が伝わる。それが可能になったのは、だれによってでもないだろう。大地がそうであるのと同じように、わたしたちの生もだれのためでもないかもしれない。それなのに、記憶が伝えられる。そう考えたとき、伝わるということの不思議がいとおしくなる。今回の展示であなたに伝えたいのはそのことである。

ああ楽しかった

市村 光治良

アーカイブの台本で、清水町に行きました。

そこで、そりさんと、会ひました。

清水町では、紙すき体験をしました。とちゅうまで、作ってあったので、

金体からみたら、ちよつとだけだったけど、紙すきを聞いていたりして、みん

なが終わった時は、五十分くらいたって、いきました。

ドロツとしていものき、船に入れて、まぜます。そして、本で作ってあ

つてさん牛うす、紙みないながあるもので、すくいあげます。それを、

三回ぐらいくり返してから、はがして、かわかすだけです。

作り終わると、ほつとして、うまくいったかと思いました。

その日は、もう寒霜「あさきり」に降りました。

夜は、しの原先生が、ランプの手紙を、やってくださいました。二つやうで

くれたらうち一つは、たが分かったけど、他の二つは、全く分かりません

でした。でも、僕でそのたを覚えてくれました。覚えてもらったので、ぼ

くもの手紙ができるようになりました。今でも、お母さんなどには、たが

を知られていません。

他に、黒板の計算のコシも覚えてもらいました。

風船にも入りました。そのお母は、特別で、なんだか、他の風船とはち

がう感じでした。スマツとして、ににおいも、どくどくにおいがありま

した。最初、においがきさいなと思つていただけ、だんだんそうでもな

くなってきました。

次の日は、朝二時を、食べ終わってから、しの原先生が、紙に描

れていつてくれました。そこで、黒板の黒板を、覚えてくれました。また、

植物で遊べるというところも、覚えてくれました。その時、しの原先生がで

るのに、自分ができないことがありました。その時は、

「しょうがないな、でも、くやしい。」

という気持ちがありました。

先生が、とても植物にくわしかつたのでびっくりしました。

その帰りしなは、くりを取つて、おじさんおばさんがいました。しの

原先生が、

「大いくりすね。」

と答つた、おじさんが

「そりやう。ちよつとぼくつちまい、くりあるわ。」

と、いつてくれました。ぼくは、(をきいた)と、思いました。おじさん

くりを見るとき、本當に大きくて、いがにおわると、とてもいたかつたす。

家で、お母さんがくりごはんにしてくれました。とてもおいしかったです。

清水町をはなれる時、

「もつといたかつたな、ととても楽しかったな」と思いました。11月に任

せんも、わるくない。いい人ばかりだったな」と思いました。

もう一度、ああ楽しかった。

「控え帳」より

季村敏夫

9月某日

亀山郁夫著『ドストエフスキー父殺しの文学』(NHKブックス)の世界は、現在と地続きである。幼児虐待。残忍な殺人。放火、少女陵辱。一八五〇年代末から六〇年代初頭、首都サンクトペテブルグは一大犯罪都市であり、荒涼たる場所がドストエフスキーを生んだ。そのありさまを丹念に描く亀山氏の筆のふるえがこちらに伝わる。今日は旅に関する言葉にふと立ち止まる。【不思議なもので、見知らぬ町を訪れるとまず初めに川を見たいと思う】。思わず頷いてしまう。川は町の記憶から流れているという。これまでたどってきた異国の川を想起する。その音、草原に吹く風、岸辺の匂いをおもう。【旅なれない旅行者が、見知らぬ町を歩くときは、何か異にでもかけられたように、同じ場所へ何度も引き寄せられるものだ……。】本を置く。ベルリ

ンのトルコ人街を私は二度訪れたが、その度にもう一度といういざないに衝き動かされていた。

9月某日

『ネオコンの論理』（光文社）を読む。二年前評判になったロバート・ケーガン（ブッシュ政権の理論的ブレーン）の論考「力と弱さ」が収録されている。一読仰天。新保守主義者と呼ばれる彼らはカントの永遠平和を侮蔑、嘲笑しているのだ。力は軍事力。文化でも経済でもなく、圧倒的な軍事力こそが世界を席捲すると説かれる。われらが首相はネオコンの考えに賛同、われらまた結果的に加担、身震いする。

10月某日

震災で亡くなった蘇理慶治郎君（当時小学校六年生）のことで、兄貴の剛志君の話を伺う。というより秋の一日、東灘区に在った彼らの住居跡を案内してもらった。既に小奇麗なマンションが建ち、どこに何があったのか、初めて訪れる者に過去をたどれるものは何ひとつ残ってなかった。家に戻り、考え込んだ。このおもしろい拮抗できる音楽は何だろう、と。明るく日、池内紀の本を引っ張り出し、サティの「家具の音楽」を聴いた。池内氏の言葉にはサティに通じる響きがある。余分な飾りは、すべて削ぎ落とされている。池内氏から、私は「^{ラヴィエ}控え囃子」なる発想を学んだ。

10月某日

岡井隆歌集『^{トウライ}馴鹿時代今か来向かふ』（砂子屋書房）を開く。いきなり次のような言葉が飛び込む。【文芸が社会に対して一定の働きかけをした時代は、もう大分前に終わった】。岡井氏の断言が強い印象をもって迫る。【かつてまだ定義されたことのない^{トウライ}馴鹿時代今か来向かふ】現在は奇妙な若者と老人が同居する馴鹿時代だという岡井氏の仮説。日々不意打ちのように襲い来る他者の暴力にどう立ち向かうのか、「終夜田間ニ彷徨」する歌の響きにおののく。岡井氏の新歌集からベルリンの歌数首選ぶ。【擱まむとすれど擱まばもろもろは拳のうちに消ゆるかと思ふ／憂ひつつ歩むあゆみにあらざれど日を追ひゆけば日は沈みたり／菩提樹の下ゆく人は菩提樹の幹によりたる人を否まむ】。歌をロザさんだとき、秋の夕暮れ、ウンター・デン・リンデンをあてどなく彷徨ったことは終生の思い出です、こういった蒼祥明君（現在CS神戸勤務）の面影が浮かぶ。

11月某日

新潟県中越地震の惨状を食い入るように視つめる。【わしの氣に入ることとは、自然もわしとまったく同様、人間を憎んでいるということです。なぜなら自然は毎日のように人間を破壊していますからね】。（サド『悪徳の栄え』）亀山郁夫のドストエフスキー論からの孫引きである。自然という観念、自然の一部としての人、そのことを深く考えねばならない。日本経済新聞紙上で「アーカイブズ零年」の連載が始まった。第一回は中国の档案馆（日本でいう公文書館）。吉林省档案馆所蔵の満州関係文書のほとんどは日本にない資料である。証拠隠滅を図った帝国軍部が敗戦前後に焼却処分にしたからである。いま日本の近現代史研究者が続々とそこを訪れているという。二回目は「ワシントン・ナショナル・レコードセンター」の紹介。ここに勤務するアーキビストには、紙きれ一枚さえ五十年、百年後まで残し続けるという責任と同時に資料取り扱いに権限が与えられている。われらが「人と防災未来センター」とは雲泥の差だ。恥ずかしい。

【新刊予告】

●『あの日、突然遺族になった』 内田洋一著 白水社・11月30日発売 1680円＋税

あの日から十年。戦後最悪の惨事となった震災だったが、被害の激烈さからすると、意外なほど破壊は局所的だった。木造家屋の倒壊率が三割を超えたのは、幅1、2キロ、長さ20キロにわたる帯状に集中し、その帯の中にいたか、いなかったか、その近隣にかかわりがあったかによって、それぞれの人生はまったく異なる歩みを迫られていたのである。まるで、突然国境線が引かれたような状況だったと著者はいう。つまり、等しく震災に遭ったようでいて、被害の受け方は明らかに不公平で、その不公平を一身に背負わされたのが、長田区をはじめとする社会的弱者の集中する地域だったのである。本書は、自らの被災体験をもとに、こうした弱者があの日以来どのように自分を取り戻そうとしていったかを丹念な取材で追いつけたドキュメントである。

●『カラー版 神戸 震災をこえてきた街ガイド（岩波ジュニア新書）』

島田 誠／森栗茂一 著 岩波書店 11月21日発売 980円＋税

震災十年を検証する活動が活発に行われています。私も市民検証研究会に、なんとなく参加していて、じつに丁寧な検証に頭が下がるのです。私は内容については皆さんにお任せして、その成果を大きく生かすにはどうしたらいいかと頭を巡らせていました。検証の硬い中身だけでなく、分かりやすい言葉でエッセンスを伝えたい。そんな思いで、旧知の岩波書店新書編集部に企画を出したのです。そして誕生したのが、柳田邦男編著「阪神・淡路大震災10年－新しい市民社会をつくる」（12月21日発売）です。ライターは山口一史、松本誠、大谷成章の諸氏ですが、研究会のメンバーの真摯な検証がバックにあります。私がこの企画に熱を上げているときに岩波ジュニア新書を書いてみないかと、全く別のルートで私にお誘いがあり驚きました。写真を豊富に入れた若い人向きの街あるき本で、震災とからめて書いて欲しいとのこと。私の手に余る仕事です。大いに悩みました。そして都市民俗学の専門家で、実際に修学旅行生を受け入れておられる森栗茂一さんに声をかけて共著としました。いざ、書こうとして資料を集めだすと、たくさんのお優れた本が出ていて気がつき、いまさら何を書くねん、と暗澹たる思いに陥ったりしました。片や、意気軒昂たる森栗さんは「写真も自分たちで撮ろう」と言い出す始末。出版予定も一月繰り上がって11月19日。夏の暑い盛りを取材して回りました。いちばん言いたかったのは都市の見方です。復興した姿だけではなく、震災、空襲、水害と災厄の歴史を遡り、平清盛の大輪田泊以来の開発など歴史の深さと世界の広がりの中、今を生きる自分との関わりにおいて見て欲しいのです。（島田誠）

● 展示図録『someday, for somebody いつかの、だれかに』 CAP HOUSEでの

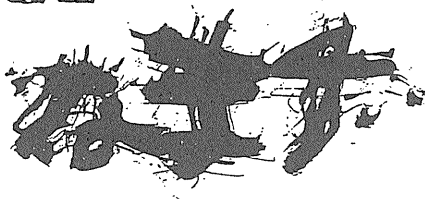
展示内容を解説。112頁（カラー16頁）。1,000円（予値税別）。目下印刷中。注文はアーカイブ事務所。

●編集後記 【井戸の星に眼をやりながら、心の中にやってくる語への希望をいだきつつ。】

1967年ハイデガーの山荘にたどり着いたツェランが記念帳に書きこんだ言葉だ。「井戸の星」とはなにか。希望とは。展示の準備中、考え続けた。ナチズムに加担したハイデガー。一方、両親を強制収容所で殺され、自らも強制労働収容所体験を持つツェラン。二人は山中でどのような対話を交わしたのか。震災一次資料の展示を試みる私たちに、遠方の足音を聴きとることが出来るだろうか。（季村敏夫）

2006 - 04 - 16

第2期・創刊号 (通巻18号)



Kawaraban namazu



瓦版なまず

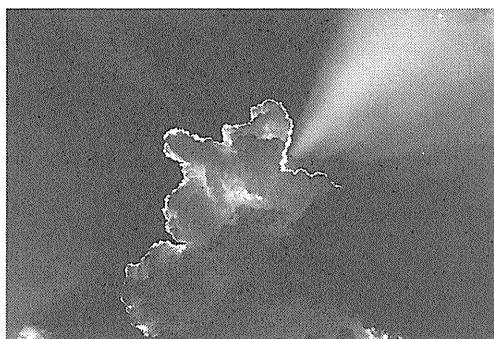
第2期創刊号 (通巻18号)

編集人：季村 敏夫

発行人：季村 範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone : 078-681-6231 Fax : 078-681-6232



今になってわかり始めたこと—木内寛子さんを送る—

藤原 直子

木内さんを想う時、ひとつの風景が立ち現れる。静かな湖。さあっと風が吹くと、湖面に小波が立つ。やがて雲間から少しずつ日が射し始め、きらきらと光の乱反射。ほとりで眺めていると、いつしか心が慰められている。いつも静かで優しい人だった。

そのほとりに立って、私は今悔いている。二年前の冬の入口、私たちは木内さんという、かけがえのない人を失った。それぞれが喪を過ごすなか、私は木内さんの書き残したものを読み返した。療養中の便り、詩、日常感じたことを書き綴ったもの。一度は読んでいたはずなのに、読み込めていなかった。失って今、懸命に木内さんを求めている。生前に何故、この気持ちで木内さんと向き合えなかったかと、悔いている。

療養中の木内さんから、私たちに届く便りには、「家でできることがあればします」と、必ずそうつけ加えられていた。辛い状況の中に

いてなお、木内さんは震災・まちのアーカイブという場とつながろうとしていた。その思いが、どこからくるのか、今になってわかり始めている。地震に遭って、木内さんはその日から被災者という、もう一人の自分を生きていくことになる。「この地震は、私にとって、渦の中にいた、はじめての体験だった。わたしは、と言うことの言いにくさ、違和としてありにくい空気を感じていた」。「いまでも地震と関わっているのは、十把一絡げにされそうになった、されてしまった、あのこと報道などによって醸された勢いに対する、うらみ、であると思っている」。木内さんは、人間の傲慢や偽善を許さなかった。「いのち自体は地震の前に、どんな生きものも変わらないのだ」。その変わらないいのちを見つめながら、木内さんは抗い、傷ついた。被災者と呼ばれて、押し込められていく力に。木内さんにとって、アーカイブとつながることは、

その力への抵抗、そして、自分自身を生きる場を求めてのことだったのではないのだろうか。

木内さんが逝き、間もなく震災十年目を迎えた。「忘れない」。この言葉が、紙面やテレビの画面に溢れていた。あなたがいたら、どんな思いでこの言葉を目にしていたことだろう。「忘れない」。いや、私はいつか木内さんのことを、忘れてしまうかもしれない。平穏な日を生きて。でもいつかある日、平穏が途切れる時、私は木

内さんの見せてくれた湖のほとりに立つ。その時きつと、湖は現れる。木内さんの見せてくれた風景は私の中に残り続ける。それは、そう信じているのだ。

木内さんを送る。去り行く死者に別れを告げる。去り行く者に別れがたくついて行く。死者に別れを告げがたく、今もまだ、あなたのあとをついて行くように送っている。一年以上たった今もなお、私はそういう気持ちでいる。

他者への呼びかけ 一資料保存活動の現場から一

なにごと二度は起こらない

けって だからこそ

人は生まれることにも上達せず

死ぬ経験を積むことも出来ない ヴィスワヴァ・シンボルスカ

季村敏夫

起こりうることは既に一度起こったこと。つかの間に過ぎる人生の瞬間は永劫くり返される。これは超越者と対峙した西の国の思想だが、日本では、硬質で内面的な論理思考はとかく敬遠され、過ぎ去ればすべて美しき日々といった詠嘆に傾くことが多い。敗戦後の知識人を襲った戦争責任論のなかに、少数だが超越論的思考の提起があった。イエスの刑死に相当する思考方法を手に入れない限り、敗戦は経験とならないと受けとめられた。地震のあとも同様だったが、体験の教訓化という浅薄な啓蒙が際立ち、分野を横断する論議（経験を積むこと）はいまだに実現されていない。以下は、資料の保存活動の現場からの報告である。

一瞬に出現した瓦礫。失いたくない、死なしたくない愛おしい物や人が焼け焦げる臭い。うち砕かれたそこに、裸の状態で投げ出される。これが本源的な姿であろう。今ここに在るアクチュアリティ。黴に地面がある。見上げると空がある。いっせいに外のそよぎがおし寄せる。【なにごと二度は起こらない】。一回限りに訪れる始原的なものから、一個の身体はついに逃れることはできない。外の現象に無関係ではありえないが、眼前の事実には指一本触れることができない。

挨拶から始まる。移動、侵入、横断。はじめに応答ありき、境界線を踏み越えて、呼びかけが響く。「ああ、何かせな」、後に「灘ボランティア」と呼ばれた人たちの呱呱の声である。残された文字資料にはないが、映像に映る十一年前の彼らの口元から発せられている。私に出来ることはありませんか。声をかけさせてください。出来ることから始めようとおもいます。1995年1月17日。一人ひとりとは内心の声に促され現地入りした。出遭いは偶然だが、一陣の風になること、先ず声をかけること。他者の苦痛へ近づき、そして遠ざかる。関わりつつ距離をもつこと、近さと遠さのあいだで揺れつづけながらの行為。世界への挨拶からすべては始まった。

居ないということ。いつもはそこで挨拶をかわせるのだが、忽然と消える。残された胸は、襲ってくる記憶に包まれる。記憶のなかの、おもかげ。小さな佛を抱く。あの日の不在への関与が、重くのしかかる。「人もろかりし／花もろかりし」、一瞬に消失したのからとり残される。不在に関わる体験。体験は、身体が裂かれつづける時間である。残された身体に記憶が疼く。そのとき佛の小さが、いっそう哀切に吹雪いて来る。私たちがたまたま事務所で行った震災一次資料。資料が収められたダンボール

箱を包む不可視の闇。そこに、生と死、集う息と消えた息、さまざまな面影が行きかう。

保存活動をすすめていると、資料の接し方をふくめ、その解読方法の根底的な変更を強いられることがある。読むことをいま一度読もうとする。きっかけはすべて、向こう側からやって来る。整理の現場にダイモンに似た声が見われ、おもわず手の動きが止まる。不在の出現である。昨年の暮れ、私たちは「灘ボランティア」と呼ばれた人たちと邂逅した。偶然性が遭いを導いていた。そのとき彼らから、「なつかしい」という声が打ち上げ花火のようにあがった。すでに他者となった資料と、十年ぶりに再会した瞬間だった。

ノスタルジイは帰ることの苦痛、ギリシャ語のノストス（帰郷）とアルゴス（苦痛）の合成語である。本来は帰属できない距離の感覚を指すが、「なつかしい」という彼らには苦痛の翳りはまったくなかった。行為のあと、普通は取り返しのつかないおもいに苛まれる。やり直し

がきかない。もう遅い。そんな声がち現れる。過去が現在に浮かび上がり、未来が現在にひき寄せられ、異なった三つの時制がスパークする。ところが眼前の彼らは違っていた。ダンボールの箱から資料を取り出したときの声は予想外だった。活動継続中なら、歓声はあがらなかっただろう。意識は絶えず途上に在るので、いうまでもないことである。過去との対面。過去と現在の同時性。そのとき生じる痛みや疼き。過ぎ去った時間に関係の傷痕が息づくとき、感傷に浸ることは出来ない。歓声は、痛みとか疼きから奇跡的に遠い場所から放たれていたのである。

なぜ資料が今ここに在るのか。在ることへの驚き。資料とは、記憶とは、いったい何なのか。そのことを問うわれわれは、誰なのか。存在論であると同時に表象論、ボランティア論であると同時に時間論。地道な資料の整理解読作業は、予期しなかった場所に連れ出されていった。（つづく）

島の記憶と記録、そして旅人宮本常一のまなざし

柳原一徳

山口県周防大島。山口・広島・愛媛の3県が接した“海の三叉路”に位置する、面積130平方キロ、人口2万3000人、瀬戸内海では淡路島、小豆島に次いで3番目に大きな島だ。この島の亡祖父母宅と神戸との間で、生まれてこの方、往ったり来たりの生活を続けている。

母がこの島、父がその属島沖家室島（おきかむろじま）の出である。私自身は神戸で生まれ育ったが、幼稚園に入るまでの殆どを、周防大島は安下庄（あげのしょう）の母方の実家に暮らした。実質関西人ではあるけれども三つ子の魂百まで、というやつである。大島方言の混った私の神戸弁は、祖父母をはじめとする島の年寄りたちが私に刻印していった、まさしくかれらの生きた証であり、おそらく死ぬまで消えない。

祖母豊田ゆき子は大島とは一見縁のない信州駒ヶ根に生まれた。明治末期から昭和戦前期にかけての大島には旧東和町の下田（したた）、外入（とのにゅう）等の部落に製糸工場があって、その仕事で信州と往き来していたのが、北原さんという親戚のおじさんだった。幼くして母親が亡くなり、父親が再婚して子どもが生まれたため疎んじられたらしく、祖母は18歳で家を出て織り子さんとして大島に来了。そこで、日中戦争で左足を失って廃嫡同然となった祖父、春一と結婚することになる。

今は跡形もないが、大正期から昭和初期にかけての大島には、養蚕とそれに連なる製糸業が、島の産業として存在した。祖父母が戦後の20数年を暮らした安下庄の庄部落の区民館は、今は建て替えられたが、むかしの建物——すなわ

ち幼少時の私が暮らしたその家は屋根が二重になっていて、元々は中2階の構造で蚕を飼っていた戦前の名残でもあった。

養蚕を島に持ち込んで奨励したのが、大島出身の民俗学者宮本常一の父、善十郎だった。本業の版元の方で、ここ数年にわたって宮本関連の仕事をいくつか手掛けている。同じ島の先達ということもあるが、祖母を信州から大島に連れてきた養蚕・製糸業との関わりの方に、実は縁を感じている。

宮本常一が晩年に著した自伝的作品に「民俗学の旅」がある。井出孫六の「抵抗の新聞人 桐生悠々」、花森安治の「一匁五厘の旗」とあわせて、私はこの本を折に触れて読み返す。15歳で島を出て以降73歳で世を去るまで、戦中を挟んだ半世紀を旅に生きた宮本のその足取りを辿ると、島に帰るために宮本は旅に生きたのではないかと、そうも思えてくる。

また、宮本の「家郷の訓」に、このようなくだりがある。

「たとえば暑い夏の日々がつづいていても、夜半とつぜん森がシウシウと音をたてはじめると、私はアオキタとよぶ秋をつげる風の出たことを知った。と急に、何だか心わびしくなってくる。それまでは波の音もほとんどきこえないが、それから一夜中ドサリドサリと波のうつ音をきくことが多い。そうした風のあとはたいいてい雨になる」

「ドサリドサリと規則正しく波のうちはじめる時は北風になる。北風であっても波の音がシャーッシャーッと何か物をすっているような時は、

潮が干いて干潟の出ている時である。それが春二月になると、ジャボジャボジャボジャボと小さくやわらかな波音にかわって来ることがある。東風が吹き出したのである。雲雀東風（ひばりごち）が吹いて春の来たことをつけてくれる」

片足の無い祖父の、沖での戦友だった「春日丸」という木造漁船を枕に聴いたあの波の音、蜜柑畑に囲まれた昔は蚕の棲処だったわが家で、漆黒のなかで聴いた風の音——それを伝える宮本の言葉。それが、いまでも変わらずこの島にある。だが、私を育ててくれた年寄りたちの多くがこの世から消えていった。高度成長を経てもなお一見大きくは変わらぬこの島の風景に、還り来ぬ人びとの想いを繋ぎ止めてもこなかった自らの来し方を思う。

話を戻そう。灯台もと暗し、というやつだろう。私はつい10年くらい前まで、自らの親代わりでもあった祖母の素性を知らなかった。震災を経て版元を始めて、そして宮本の仕事に惹かれて物書き兼編集者の仕事を再構築すべく、私のいちばん身近にある謎の人物のライフヒストリーを記録しようと録音テープを回し始めたその直後、突如として祖母は消えた。旅先で倒れ、変わり果てた祖母を私は島の家にも連れて帰った。最期の最期で私を呼び寄せたのかもしれない。信州への想い断ち難くあった祖母にとって、旅の途上だったのか。ともあれ、島の子として私を育てた祖母は信州ではなく周防大島の土になった。それだけは事実だ。

（やなぎはら・いっとく みずのわ出版代表）

[出版案内]

『宮本常一のまなざし』 佐野眞一著

2003年1月刊 A5判上製 207頁

●本体価格 3000円（税別）

■カバー写真 芳賀日出男

■装幀 林哲夫

『周防大島 島末(しまずえ)の記憶』 福田忠邦著

2006年1月刊 A5判並製 67頁

●本体価格 1000円（税別）

■装幀 林哲夫

残部僅少

発売元：みずのわ出版 URL：<http://www.mizunowa.com/>

『器物』について、いま考えること

瀧 克則

以前、『器物』という作品集を出した。そのなかに「便器」という作品がある。これは、小便器の前に立って用を足しながら、幼い頃の用足しの風景の記憶をたどり、その想像が展がっていくという作品である。私はこの作品を書いていたとき、便器という物が私の目の前にある、ただそのことだけを書こうとした。それがそこにある、そのことは詩作品でしか伝えられないもののような気がした。便器があるということが開いていき、様々な記憶があらわれる。私は、私を知る便器を描写した。

そのときの私を考える「知る」とはその物の名前を知っているということではない、また、その物をどう使用するかを知っているということでもなかった。自分の持つ知識としてのその物ではない。もっと、直接身体にしみとおるような在り方をその物達は見せているように思えた。その物が経験した様々な出来事や、その物と私との出会いの記憶がその物から開かれてくる。その物を知るとはそんな体験をすることではないだろうか。だが、はたしてそのようなことが可能だろうか。その物を見るやいや、たちまちそれはビンであり鉛筆であり物差であることに収束してしまう。見るということとそれが何であるかを認識するということが同時に起こる。認識とは私の知識がそれをその物と認めることである。そこでその物は私にその物の本当の姿を見せるのを拒んでしまうのである。というより、私の見方にその物は合わせてくるのだ。そのとき、私は見るということの強固な力に気づいた。古事記の黄泉での記述や、ギリシャ神話のオルフェウスの見ることの禁忌を犯すことにあらわれる、見ることの不条理にあらためて気づいた。ただ、私は目の前に見える物を見えるがままに、またそのとき心に浮かんだことをそのまま記述するという方法でその物を開くということを実践した。

その頃からずっと心に引っかかっていることがある。それは、私ということである。私の知識や経験からその物を知り、それをビンとして記憶することで日常は滞りなく過ぎてゆく。だが、そのビンが在ることを見ている私はいつのまにか真っ白になった状態でのみビンの在ることの本当に近づくように思える。では、そのと

きの私とは何者なのだろうか。もちろん私には変わりはないし私以外の何者でもない。だが、どうしても普段の私とは違うように思えるのだ。普段の私は生活の中にいる。そこでは私なりの位置が定められている。家庭では父であり職場ではその所属する部署の一員である。生活の中の合目的性に置かれている。だが、それとは異なる私を私は実感する。物が在るというときにその物が物の合目的性から離れてあるように思えるのと同じように私もまた在るのだ。その私には、目の前に在る物から導き出されるように様々な事柄が浮かんでくる。それは記憶ではなくむしろ創造する意識だと思われる。

物がその合目的性から離れて在るとき、私はその物が居るというように感じる。在ると居るの違いはその言葉に対する理解の差であるかも知れない。だが、物に対する「在る」は、人あるいは生き物に対する「居る」とは私は使い分ける。落語に紀州の言葉を種にしたものがある。「下駄が居るから彼がある」という言い方だ。人に対して在るといい、物に対しては居るといい。紀州弁を笑ったものだが、私は物が普段と違った在り方を見せるときそれが居るように思える。

百年経た器物には付喪神という神がとりつき、その器物は秘かに妖しく活動するという話が御伽草紙など昔の書物にある。このことは、決して草紙や絵巻の中の話ではなく、器物に対する我々の先祖の日常の認識であった。このように物にたいする見方はそれが茶碗や鉢という生活道具にとどまらず、そのものが醸し出す言い難い存在感のようなものを、かつては様々な神の名をつけて表していたのだ。私達の先祖の、物の在ることにに対する畏れを私は信じる。それだけ、物との間が近しかったのであり、物もまた私達に対して開かれていたのだ。私が物が「居る」と思う感覚は物に付喪神がとりついた状態なのだ。つまり、付喪神は「在ること」なのであり、物にとり憑くのだ。それは私が祖先から受け継いだ創造する意識の表れでもある。

私は、事物に対する私の記憶とは、私という一人の人間にのみとどまるものだとついいままで考えていた。だが、『器物』を再考してみて、その考えが誤りでありそうに思えている。

表現としての記憶

笠原一人

記憶の問題は、多くの場合、出来事の記憶を宿す事物を残すか否かという、二元論的な問題として扱われている。記憶の問題とは、記憶の保存の問題であり、記憶を残すことこそが記憶にとって「正しい」ことだという認識があるのだろう。だが、記憶は残しさえすればよいのだろうか。そもそも、記憶は「残す」（あるいは「残さない」）ものだろうか。むしろ記憶は、本質的に、人の意に反して「残ってしまう」（あるいは「残らない」）ものであり、「伝わってしまう」ものだと考えたほうがよいのではないか。

忘れようと思っても忘れられない記憶がある。自分は知らなくても、誰かが知っている記憶がある。他者の記憶を、自分の記憶だと思い込んでいる場合もある。これらは、記憶の他者性を意味しているだろう。日常の身の回りにあるすべてのものは、すべて何かの出来事の記憶を内包している。世界は、すべて何かの出来事の痕跡として出来ているのだ。それは、この世界が存在する以上、消すことの出来ないものだろう。記憶は、人間が思うようにコントロールできる代物ではない。それが現実である。

にもかかわらず、記憶の問題があれば、記憶をありのまま残さなければならない、風化させてはならない、という脅迫観念のようなものが、人々を縛り付ける。記憶の風化という発想は、当時の出来事こそが真実であり、時間がたてば真実は失われるという考えに支えられている。しかし実のところ、記憶に真実や風化などあり得ない。記憶はいつでも、人間の意に反して偶然に晒され、変形や創造を重ねて新たな記憶となり、いつかのだれかに伝わって行くしかない。実は、風化という発想をやめることが、記憶を風化させぬ唯一の道だと言えるだろう。

だとすれば、我々が考えるべきことは、記憶をコントロールし、（意図的に）残すか否かと問いを立てるのではなく、我々のコントロールの外にある記憶といかにに関わり、いかに伝えるかという問題だろう。すなわち方法の問題である。記憶を残すか否か、という問題も、いかに

伝えるかという方法の問題の一部として捉えればよい。

その際重要になるのが、表現の問題である。記憶を伝えようとするなら、そこには必ず表現が介在する。表現と言え、ば、「表現主義」という20世紀初頭の芸術の潮流に対する名称のように、個人や共同体の内面を表出する営みを連想させてしまうが、ここで言う表現はそのようなものではない。我々の記憶との関わり方を意味している。記憶は表現のあり方次第で、その残り方や伝わり方は大きく異なってくる。

ではどのような表現のあり方がよいのか。重要なのは、他者に出来事の「真実」を伝えることは原理的に不可能である、ということを前提した上で、あらゆる他者がその出来事の記憶に関わることを可能にするような、開かれた表現を模索することだ。記憶を伝えるとは、本来、記憶を特定の誰かに占有されたものにしてしまうのではなく、万人に開かれた、誰もが分有し得るものにすることを意味している。我々は、その本来の記憶のあり方を損なわぬよう、万人に開かれた表現方法を探るべきなのだ。

例えば、記憶はしばしば出来事の当事者の「語り」や「証言」によって表現されるが、それは記憶の当事者だけが為せる表現に過ぎず、出来事の方当事者はそれに対して受動的に関わるしかなく、彼らが自分の問題として理解したとは言えない。そのような表現は、いわば独り言に過ぎず、何も伝わってはいない。風化を恐れて「真実」にこだわろうとする表現が、かえって記憶を風化させるという矛盾を孕んでいる。「語り」や「証言」が社会的に重要な効果をもたらす表現であることは理解しているが、このような危険性を孕んでいることもまたまぎれもない事実なのだ。

それに対して「朗読」は、他者によって文字として書かれた記憶を、新たな他者が声によって表現する方法である。出来事の「真実」をありのままに伝えはしないが、震災の当事者や非当事者に関わりなく、万人が文字となった震災の記憶に、自由に主体的に新しい声を重ね、過

去の出来事を現在の新たな出来事にすることが可能になる。「語り」が記憶の「真実」を前提にし、記憶を閉ざしてしまう表現であるのに対して、「朗読」は記憶を万人に開かれたものにする表現形式なのだとと言える。

記憶の問題は、表現の問題である。我々と記憶との関係のあり方の問題である。その関係のつくり方次第で、記憶は「真実」を前提した閉じたものになったり、開かれたものになったりする。我々に課せられているのは、その都度、

記憶を開かれたものにする、「正しい」表現を模索し続けることなのだ。

現在、寺田匡宏氏とともに『記憶表現論（仮題）』なる書籍の出版を企画している。これは、前述のような意味での記憶の表現のあり方を問い直そうとするものである。次号で、その詳細に触れたい。

（京都工芸繊維大学大学院助手、建築史）

活動日誌

震災10周年を記念した震災一次資料の展示を終えた後、やむなく活動を休止せざるをえなくなりました。しかし、そのなかでも、これからの活動を模索する集まりは不定期に持ち続けました。

その間、「なまず」創刊号でとり上げさせていただいた「喫茶アール」の森山千代江さんが他界されたことを知らされました。いつでも暖かいコーヒーで迎えてくれた姿が目に残ります。藤原直子さんが巻頭で書かれている木内寛子さんも亡くなりました。設立初期からのメンバーだったので衝撃でした。

この数年、「灘ボランティア」の一次資料と取り組んできました。昨年の秋、主力メンバーの一人の中村由紀子さんを訪れるということがありました。引き続き、ほかの方々との出会いがあり、活動再開のきっかけとなりました。

さまざまな出会いと別れが、アーカイブ第2期の再出発をあと押ししてくれています。

（季村範江）

* * * *

2005年

- 1月14日～23日 「阪神大震・記憶の分有のためのミュージアム構想展」に共催参加。
- 2月26日（土）「言葉と記憶—細見和之さんを囲む会」於：県民会館
- 4月30日（土）季村敏夫、範江、プラハゲットー跡へ。
- 5月22日（日）「ショーア・震災—記憶の層を巡って」報告：季村敏夫。神戸・ユダヤ文化研究会にて。
- 6月19日（日）宮本佳明展「巨大建築模型ミュージアム〜環境ノイズエレメントを解説し、都市を設計せよ」見学。キリンプラザ大阪6F。
- 6月26日（日）これからの活動に関して討議、アーカイブ事務所で。
- 7月16日（土）これからの活動に関して討議、アーカイブ事務所で。
- 8月2日（火）映像とトークの会、「メモリアルすることの困難」報告：笠原一人、「戦争メモリアル、アジアを歩く」報告：寺田匡宏、ギャラリー島田で。
- 8月12日（金）藤原秀次、直子、ハンガリー動乱の激戦地区ブタペストのカルビン広場へ。
- 9月10日（土）これからの活動に関して討議、アーカイブ事務所で。

- 9月16日～20日 ポーランド、オシフィエンチムのビルケナウ絶滅収容所へ、国立アウシュヴィッツ博物館公認ガイドの中谷剛氏（神戸出身）取材。クラクフ、ワルシャワゲットー跡訪問。季村敏夫、西榮一。
- 9月23日（金） これからの活動に関して討議（アーカイブ事務所）。元町通りに出来た「市民活動センター神戸」の事務所開きに参加。実吉威さん、八十庸子さんと懇談。
- 10月3日（月） 第四回「震災資料保存・活用に関する研究会」（主催：神戸大学文学部地域連携センター）に季村範江参加（於：人と未来防災センター）
- 10月8日（土） 「灘ボランティア資料」の整理に関して討議。アーカイブ事務所で。
- 10月23日（日） 「灘ボランティア資料」の整理に関して討議。アーカイブ事務所で。
- 11月3日（木） 「灘ボランティア資料」の整理に関して討議。アーカイブ事務所で。
- 11月20日（日） 篠山市の中村由紀子さん（灘ボランティア代表者）訪問（季村敏夫、範江）。
- 11月23日（水） 「木内寛子さんをしのぶ会」於：東天閣、（季村敏夫、範江）
- 11月27日（日） これからの活動に関して討議。於：新家。八十庸子さん参加。
- 12月25日（日） 灘ボランティアの主力メンバーだった中村由紀子さん清水信年さんら6名来られる。一次資料や当時の録音テープを聞きながら交流会。

2006年

- 1月7日（土） 「灘ボランティア資料」をどういう視点で取り組むのか、討議。於：鴻華園
- 1月15日（日） 「クオリアについて―茂木健一郎著『脳と仮想』に触れながら」報告：菅祥明
- 1月17日（火） 朝日新聞朝刊に、「風の存在―灘ボランティアについて」（季村敏夫）発表。
- 1月23日（月） 「人間は阿片より阿片である」佐野眞一講演会。大阪府立青少年会館で。参加者藤原直子、季村敏夫。
- 1月28日（土） 「灘ボランティア資料」をどういう視点で取り組むのか、討議。
灘ボラの清水信年さん来られる。
- 1月30日（月） 第五回「震災資料保存・活用に関する研究会」（主催：神戸大学文学部地域連携センター）に季村範江参加（於：人と未来防災センター）
- 2月18日（土） 「出遭いについて―九鬼周造の偶然論に触れながら」報告：佐々木和子
- 2月19日（土） これからの活動に関して討議
- 3月15日（水） 第六回「震災資料保存・活用に関する研究会準備会」（主催：神戸大学文学部地域連携センター）に季村範江参加（於：人と未来防災センター）
- 3月21日（火） 「資料とは何か―ハイデガーの時間論、ベルグソンの記憶論に触れながら」報告：季村敏夫。
- 3月26日（土） これからの活動に関して討議、アーカイブ事務所で。

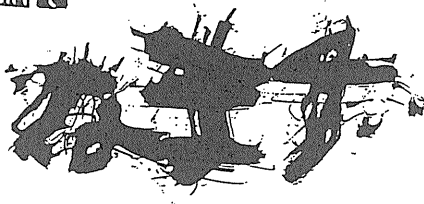
【あとがき】

ひょんなことから「板木の所在目録」ということを知った。板木はグーテンベルクに抗った江戸の出版文化が生んだ技術である。筆耕と呼ばれる職人が逆さまに書き直した文字を彫師が板木に彫り、摺師が刷り、製本したものが板本である。すべて丹念な手仕事。今その板木の所在が危ういという。グーテンベルグを受けつかなかった強靱さは見直すべきだともうがいかがであろう。

さてわれわれのグループだが、今までをどう解体させるかで逡巡したが、巻頭文「今になってわかり始めたこと」を送り出せたことでひと山越えることができた。記録のアクチュアリティ、記憶における過去と現在のからみあい、身をさらすこと。静態としてとらえていたアーカイブズを知覚の交通の場とすること。再出発である。次号（7月上旬予定）では、「灘ボランティア資料」の保存解説を巡る、あつという新展開を紹介できるとおもう。（季村敏夫）

2006 - 07 - 18

第2期・第2号 (通巻19号)



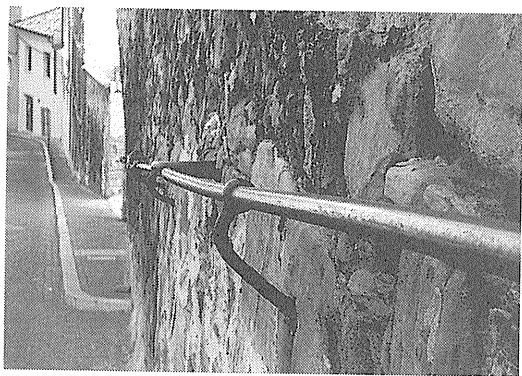
Kawaraban namazu



瓦版なまず
第2期第2号(通巻19号)
編集人: 季村 敏夫
発行人: 季村 範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone : 078-681-6231 Fax : 078-681-6232



トリエステ 山の道 photo by Toshio Kimura

何をいかに「待つ」べきか

徳永 恂

一、「待つ」のは苦手^{にがて}の方である。とくにせっかちというわけでもないが、たとえば漫然と街路を歩いていて、交叉点で赤信号に引っかかると、私は無意識的に青信号の方へ曲がりたくなる。別に急いでいるわけでもなく、回り道になってかえって時間がかかることがわかっていてもそうだ。たしか幸田文さんだったと思うが、何かの随筆で書いていた。彼女は四つ辻で信号が赤になり横断歩道の両側に人が溜まっていく時の間が好きなのだそう。なぜならそれは、横断歩道の向う側に立ち止った人たちの顔を、他人の視線を気にすることなしに観察できる得がたい機会だからだそう。むろん男にしろ女にしろ、鑑賞に耐えるような顔面の構造の持ち主が、そうザラに居るとは思えないから、その時その人たちの顔に現れているのは、進行を中断された怪しいらだちと失望、しかし信

号が変わるまではほかに仕様がなという軽い投げやりと、場合によっては軽い安堵の混った表情だろうか。それを見る幸田さんの眼には鑑賞者のゆとりよりは、観察する鋭さが光っていたかも知れない。その時、青信号の方へ、目的とは九〇度逸れた方向へ歩いていく私の姿は滑稽であり、幸田さんの眼には、「待つこと」を知らないせっかち男への憐れみもしくは蔑みが浮かんでいたかも知れない。

二、「待つ」という言葉は一見明確だが、それが表わす人の心や身体の動きにはさまさまの位相がありそうである。「待てば海路の日和あり」といったことわざのように、古来「待つこと」のメリットが説かれ、あわてることが損に連なるとしていましめられてきた。詩歌の面でも、靡をゆする

秋風のそよぎにも君を待つ心をゆるがせる昔の相聞歌から、待てど暮らせど来ぬ人を想う宵待草のやるせなさに至るまで「来ぬ人を待つ」想いは、もっとも重要な発想源の一つになっているだろう。現代のように、一定の期限を持った約束や契約が社会生活を秩序づける原理となっている所では、待つことは、時間厳守の倫理の例外的、補足的意味しか持たず、チャンスを有効に利用するための手段になり下っているように思われる。たとえば借金ないし原稿のシメ切りをもう少し待つてくれとか、野球なら、狙い球がくるまで待つて、充分引きつけて打て！とか。それでも恋人たちの待ち合わせと待ちぼうけをめぐるドラマなど、「待つ身のつらさと待たせる身のつらさ」といった余波を含めて、現代人の感情生活の重要な一面になっているだろう。

三、しかし「待つ」ということが、もっとも形式的には、時間の中に生きる人間が、現在での不足、欠如の充足を、将来に期待することを意味するとすれば、それはたんに空間的場面で対人関係において生じるだけでなく、孤独な一人の人間の生き方、時間に対する身の処し方に関わるものであろう。前にあげた野球のバッターがボールを引きつけて（待つて）打つ場合なども一人での動作ではあるだろう。しかしそれはヒットを打つという目的のために有効な手段として「待つ」ことが求められているにすぎない。そういう実質目的と離れた「待つ」というものもあるのだ。

四、ゲーテに「旅人の夜の歌」と題されたいくつかの詩がある。その一つは1780年ボーデン湖のほとりイルメノウの山頂で作ったと言われる「すべての山の頂には静けさがある」と始まる有名な詩で、シュペルトの歌曲としても知られていると思うが、この詩の末尾は、「待てしばし、やがてお前も休むことがあろう」という「待て」のリフレインで終わっている。訳によっては、この詩は登山者の達成感とも、あるいは文豪の完成した境地とも取れるのだが、私はこの「待て」という自分への命令形を、将来目標の待望よりも、現在の苦しみ（努力するかぎり迷う！！）もいつかは終る時がこよう。だから頑張れ！！という現在の自分への激励慰留のつぶやき、と取りたい。彼は晩年、最後の誕生日にもここに登って山小屋の壁に、かつて書き記したこの詩句を見出し、涙しながらこのリフレインを口ずさんだと伝えられる。五〇年の間を置けば、作者にとって同じ詩も違ったふうに見えてくるだろう。「休らぎ（＝静け

さ）」という言葉に晩年のゲーテは、自らの死を託していたかも知れない。しかし若年の作者の口吻には「待つている。僕だっていずれは」という自信が漂っていたのではなかろうか。

だが待つてほしい。ゲーテは私には偉大すぎる。彼は時間に対しても「待て！！」と命令することができた。（止れ！！瞬間よ。お前はあまりにも美しい。）私はこの辺で舞台を別の荒野に移し、ゲーテの瞬間とは別の時間性と待つことの別の姿をうかがうことにしたい。

五、其年其月。所はイスラエル、エルサレムの郊外。

ほとんど緑もなく、砂漠に近い砂礫が広がっている。イスラエルには線路を走る汽車も電車もないから、都市を結ぶ長距離バス用の自動車道路が走っているばかりだ。その途中、ヘブライ語、アラブ語、英語とこの国の三つの公用語で書かれているバスの標識らしきものが立っているあたりで、私はバスを待つていた。定刻通りに交通機関が動かないのにはもう慣れていたのだが、さすがに一時間も炎天で待つていると、私もしびれを切らしてきた。たまに砂埃を上げて走ってくるのは軍用トラックで、いくら私が「今日は！シャローム

（＝平和）」と叫んでも、完全武装した若い兵士たちが私を乗せてくれるわけはなかった。見るとよこには黒い民族衣装をつけた老人がツクネンと座っていて、彼は軍用トラックに手を上げることもなく、黙然とうずくまったままだった。遂に私はたまりかねて近寄っていつて話しかけた。「全然何も来ないじゃないですか。あなたはいつたい何を待つているのですか。」彼は答えて言った。「わしはメシアを待つているのさ。あんたは何を待つていなさるかね？」私に何を答えることができただろう。

何を、あるいは誰を待つのか。待つとしていつまで待つのか。メシアが来るまで。無限者を無限に待つ。これがユダヤ教の精髓である。キリスト教は、イエスの贖罪死と復活をもってメシアの現世への到来と見なす。しかしユダヤ教はそれを認めないから、メシアの到来はひたすら将来のいつか或る時に押しやられる。だから彼らはひたすら「待つ」のだ。

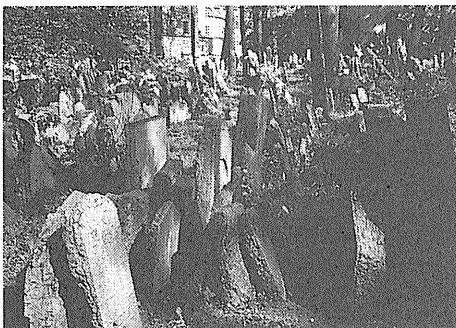
六、「人ありエドムなるセイルより我をよびていふ、斥候よ、夜はなほ長きや。ものみ答へていふ。朝は来る、されどいまはなほ夜なり。汝もし問はんとおもはば再び来れ。」かく告げられた民族は、その後二千年餘の長きに亘って同じことを問ひつづけ、同じことを待ち焦がれつづけて来た。そし

てこの民族の怖るべき運命は我々の知るところである。このことから我々は、徒に待ち焦れてゐるだけでは何事も為されないという教訓を引き出そう。さうしてこうした態度を改めて、自分の仕事に就き、そして「時代の要求」に——人間的にもまた職業的にも——従はう。このことは、若し各

人がそれぞれその人生を操つて^{デモン}いる守神をみいだしかつそれに従ふならば、きわめて容易に行はれるのである。」

終わりに、この引用はマックス・ウェーバーの『職業（ペルーフ・私は天職と訳したい）としての学問』（岩波文庫版）より、「時代の要求」とはほかならぬゲーテの思想。彼の場合、「自分のデモンに従うこと」と「日々の仕事」とはどのような形で統合されたのだろうか。尚『聖書』（イザヤ書21章）のエドムの斥候の歌を、ウェーバーはルターのドイツ語訳によって引用しているが、現代の日本語訳（『現代訳聖書刊行会

版』）では「悔い改めなければ、また夜が来る」などとなっていて、やがて来る夜明けを待つという基調が消えてしまっている。



旧ブラハ・ゲッター内のユダヤ人墓地
photo by Toshio Kimura

亡命ユダヤ人と遊んだ少女

—山形裕子歌集『ぼっかぶり』から—

季村敏夫

昭和16（1941）年の春浅い三月、一群の亡命ユダヤ人が神戸の坂道（山本通2丁目）を歩いてた。リトアニア日本領事館発行の、あの杉原ビザを携え。

シベリア経由でウラジオストクから敦賀へ上陸した彼らは、アメリカへの渡航ビザ発給を待つため神戸へ向かい、一時的に滞在した。ディアスポラ、離散するユダヤの人びとにとり、「待つ」ということは、どのような堪え方だったのか。

河野徹の構えるレンズに、うぶ毛のひかる手塚治虫少年が写っている。むしろそばには、父である手塚繁（てづか・ゆたか。淀屋橋にあった住友系企業に勤務。カメラが趣味。）の影が。手塚繁も河野徹も、当時の若き前衛写真家の安井仲治（やすい・なかじ、1903～1942）率いる「丹平写真倶楽部」のメンバーだった。撮影された作品は、その年の五月、「流氓ユダヤ」として発表されていることは周知の通りである。またその日の遭遇が、後の傑作『アドルフに告ぐ』（1983～85年「週刊文春」連載）を生み出す契機となったこともよく知られている。他にまだ、異邦人を目撃し、その衝撃が忘れられないという人は居るはずだとわたしはずっと思っていた。

「時は満てり」、山形裕子歌集『ぼっかぶり』（ながらみ書房）に収められた亡命ユダヤの人びとに出遭ったとき、眩暈をおぼえた。写真でしか知ることのなかったが、ここにはことばがたち現われている。出遭いの現場を先ず眺めてみよう。

夏の朝近所の大きな洋館にがやがや見知らぬ外人の列
 汽車で来たユダヤ人はしばらくここに住むその後どこかへ行くんだそうだ
 夕立に駆け込んで来たユダヤの子 破れた大きな西瓜を抱いて
 早うお逃げ 早うお逃げおばあちゃんユダヤの子供に蛇の目持たせた
 扉を押して出て来る出て来る早朝の道路に黒いユダヤの衆が
 発つんやなユダヤは港へ向かうんや 歯刷子持った父さんが言う

疵だらけの皮のトランク重そうなユダヤの大人は冬制服
夕立の昨日ピンクの少年も長いズボンに長袖のシャツ

引用した歌は、過去の現存という瞬間が切り取られている。半世紀以上も前の記憶の古層から発せられているにもかかわらず、どの歌にもみずみずしい現在の情感があふれ、年齢をまったく感じさせない。潜在的な記憶が収縮して現在に雪崩れこみ、いわば過去と現在が同時に泡立ち、光っている。戦時またま神戸に住んでいたひとりの少女が目撃した亡命ユダヤ人の光景であり、今となつては奇跡的なドキュメントである。ドキュメントといえば、西東三鬼の『神戸 続神戸 俳愚伝』（講談社文芸文庫）をたちどころに想起するが、山形さんの歌集は、手塚治虫の『アドルフに告ぐ』同様、ユダヤ人と敵対したドイツ人（明治42年に「神戸ドイツ学院」設立）のみならず、さまざまな異邦人が奇妙に共生する姿を、少女の視線からとらえたところが出色である。

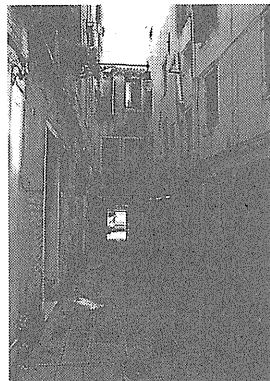
ジキオンとマレオン姉妹のファーターは由緒正しいドイツ領事官
エリザベート彼女は八つのスイス人 電柱にマレオン追い上げてしまう
印度人パテルさんの子レイちゃんはままごと好きの静かな七つ
さよならも言わずにマレオン達が消え猛犬ヘルグは殺された
神戸っ子のお国言葉は兵庫弁 ア媽さん仕込みよエリザベートも

山形裕子さんは六甲で育ったが、江戸期以来の神戸人。祖母は生粋の兵庫弁の女言葉しか話さなかったという。最後の歌の阿媽さんは広島語の阿媽（アンマ）が語源で、福建省やマカオでは漁師を守る海の神さんで日本にも伝わっている。台湾の旧日本軍の慰安婦も阿媽（アーマ、アマ）と呼ばれたが、引用の歌では日本人家政婦のこと。阿媽さんは家事労働というまでもなく、暮らしのなかで起こった社会や文化的摩擦の貴重なパイプ役でもあった。（戦時下の神戸の阿媽さんについては、神戸ドイツ学院の元在校生や、戦後故国へ帰還したスイス国籍、オーストリア国籍ドイツ人への聞き取りを実施した若い中村綾乃さんの「ハーケンクロイツと日の丸のあいだー神戸ドイツ人社会からみるナチズム」参照、雑誌「みすず」495、496号で連載）次に、あとがきから引用する。

私にも心のついた昭和十年代のはじめ頃は、六甲が村から町へとようやく変わった時期だったと思う。いわゆる土地の人は先祖伝来の田畑を宅地化の波に乗せて、どんどん借家を建てていった。借家には純洋館もあれば和洋折衷もあって、どの家にもゆったりと庭がとってあった。そこへ外国人が住みつき、地方から移って来た人が住む。土地の人は百姓をやめて旦那になった者もあったが、もともと田畑の無かった者は相変わらずの貧乏人である。お寺も大工さんも昔のまんま。私の小さかった頃は互が屋号で呼び合っていたため、小学校に入学してはじめて名字を知った友達もある。私の家だけが江戸の末期に兵庫から移って来たために屋号がなかった。

歌は、抑圧された記憶の迸りである。本歌集におさめられた作品はすべて、作者の幼少時の記憶が口語体で歌われている。突然襲われた脳梗塞。死をつよく意識したとき、眠っていた記憶が目覚め、歌を引き連れる。病室に置かれたベッドが闘いの現場である。記憶の納屋から引き出された痕跡が夢枕にあふれ、私が歌うのではなくむしろ過去が歌うといった按配で、かつて起こった切断面が次から次へと歌われる。老いゆくひとが繰り広げるこの光景には普遍性がある。はるか西方の地から、シベリア鉄道を乗り継いで極東日本の神戸へたどり着いたユダヤの人びとと、こうして六十五年振り再開できる僥倖を読者はそれぞれの現在で味わうことができる。

タイトルの「ぼっかぶり」はゴキブリ（御器、五器覆り、嚙り）のこと、かつて神戸で流通していた言葉である。アフリカの大地に出現して現生人類は約十五万年、ひきかえゴキブリやトンボは二億とも三億年ともいわれる。われらが先輩であるゴキブリからとらえられた発想とは、ユウモアに満ち、何と壮大なことか。山形さんの歌の記憶には、おくもじ、おてしよ、おみじなど、播州や船場言葉に影響を受けた兵庫のゆかしい言葉が息づき、そのことは、『撰西兵庫俳諧史』（みるめ書房、坂井華溪著）の江戸期兵庫の古俳諧の地誌や『淀川長治自伝』（中公文庫）のなかの西



ヴェニス ゲッター
photo by Toshio Kimura

柳原の記述などをひもとけばより深い理解が得られるだろう。最後に三首、忘れがたい歌を。

ぽっかぶりみたいな奴ちゃやお前らは墓に供えた供物を食べた
 ヒットラーの敗けた五月の朝のことネトケ夫妻がガス自殺した
 さよならも言わずにみんな消えてゆく 神戸に火の雨降る日が近い

*山形裕子歌集『ぽっかぶり』(ながらみ書房)2006年3月27日発行

兵庫の津 古い言葉

和田英子

各地の方言を連ねたはやし言葉に、「長崎ぽってん 兵庫神戸のなんどいや」といわれて、品のない言葉だと神戸に住むものは眉をひそめるのであるが、「なにしていけつかんねん」とすすみ「なにさらしていけつかんねん」となれば、さすがに当地生まれの者も顔をあからめるのである。親たちが親しみをこめて言う清盛はんが開いた兵庫の津は平家滅亡のあと主産物の陸揚げの地となり、倉庫をたてる商人もいる繁栄ぶりであった。鎌倉時代には一遍上人、叡尊等名僧が踵を接し、また遊女が大勢(千数人?)いる港町と記録されている。

先年没した映画評論家淀川長治氏はこの歴史の古い花町(柳原)に生まれ育った。家は置屋で若い芸子、三味線、白粉の匂いの中で成長した。

自著『淀川長治自伝(上)』中公文庫版にその頃のことを思い返して語っている。

・・・ごりよんさんのことを関西では「おいえはん」とも呼ぶ。ときには若い母は「ごりよんさん」その母の母つまり祖母のことを「おいえはん」とも呼ぶ。お嬢さんは「とんとん」、あるいは「おいとはん」、息子つまり坊ちゃんとは「ぼん」。とんとんは思うに「とうさん」とも呼んだそれからの変化、「とうさん」とはお嬢さんの呼び名。「ぼん」または「ぼんぼん」も東京流に言えば「ぽっちゃん」そのぽっちゃんの弟は「こぼんちゃん」と呼んだ。

古い大きな町屋の軒先にシェンバードやブルドッグが寝そべっていて、町屋でありながら威光を放つ旧家は、ええし(良い衆)と呼ばれていた。学校には、ええしのこが何人かいた。

会下山から見下ろす一帯はわが地所でその家運を傾けて南蛮美術品を収集した池長孟氏邸は淀川

家の近くにあった。当主は葺合の方へ家を建てて移り本宅は使用人が留守を守っていた。

建物の外回りの仕事をする人は(おとしさん)と呼ばれていた。女中さんは(おなごし)と呼んだ。夏の夕方、旦那さんの顔がハイヤーの窓に映ると、路地の店子は「大阪へダンスホールに行つてや」と話し合った。なにによらず兵庫はしきたりがうるさく古い町から新しい町に池長氏は通走したのである。

月参りに来るお寺さんは(おおっさん おじゅっさん)と言った。おじゅっさんは、お住職をつづめたものだろうか。尼さんは、(安寿さん)と言った。

店の店員は、(ぼんさん)。いたずら坊主は(権太 ごんたくれ。)

父母のことをオトン オカン 成人してオトオハン オカアハン(これは男の子の言葉。)

知人のOさんのお母さんは生粋の兵庫っ子である。近所の人と挨拶するとき、「しゅうちゃくしごくでございます」と言い、「うつけものでございます」と息子のことを言っていたという。「祝着至極でございます。」「空け者でございます」は「なんどいや」の次元と程遠く、まるで信長の時代やね、と居合わせたものは首をかしげるのであった。

女学生のころ、東京から転校してきた人としやべっていて「あの服はこうとで」と話すと「こうとってなに」と反問されたことがある。地味ということと答えたが、語源はわからなかった。最近京都の詩人からの散文集の中に「着物は、派手でも、こうと(地味)でもあきまへん。皮肉なもんがよろしおす」という一行があった。(こうと)は京都でも使われていることを知った。辞書を見ると、江戸の別称とある。ようやく気づいた。江戸の着物は江戸小紋など京都の柄ものに比べて地味である。それで上方の女性が江戸→こうと→地

味と言ったのだろう。神戸にも呉服屋などから伝わってきたのだろう。

淀川さんは、神戸と神戸の言葉をいとしんだ。

東京の言葉をほめているうちに思わず関西べんに話に移ってしまったが、これはやはり私が東京べんをほめながらも心のうちで関西人に「かんにんしてや」「かんにんやでエ」「ほんまいうたら、うち、関西のひとのほうが好きなんやでエ」と申し訳をしているにちがいない。私という人間は生まれた故郷を愛し神戸以外よいところはなしと思ひ、・・

『淀川長治自伝（下）』中公文庫

先年、芦屋に谷崎潤一郎記念館が建ったとき開館式に松子夫人、高峰秀子さんと淀川さんの講演があった。淀川さんが見事な関西弁とほめた『猫と庄造と二人のをんな』に言及されたかどうか記憶は薄れてしまった。

兵庫のええし（良い衆）池長さんと、淀川さんの姉富子さんは、恋愛し結婚したが彼女は派手に遊び、自殺未遂まで起して離婚した。池長氏は離婚手当を今で言えば何十億円を支払ったと淀川さんは記している。むかし、ええしを百万長者と言

ったが、豆乳を豆ソップと言って愛用した兵庫の「ソップ族」には雲の上以上の話である。

薄墨色の漆喰壁に鎧戸のある兵庫の町屋が姿を消したのは、太平洋戦争末期の集中的な空爆による。清盛塚、兵庫運河、大輪田橋の付近は火が両岸に迫り、死者は新川の遊女を含め4～500人に及んだ。

戦後、焼け跡のこのあたり一帯接収されて住人は元の住所に戻ることができなかった。ひろいうエストキャンプは黒人兵のかまぼこ兵舎が並び、土地が返還されたときは古い戸主たちは現世にいないようになっていた。

豆ソップをいつも飲んでいた商人の伯母や従兄弟たちの兵庫弁が聞きたい。

編集部註

*和田氏には戦前の兵庫に関する記述は多いが、「昭和十二年兵庫門口町」（『行きかう詩人たちの系譜』編集工房ノア、所収）が参考になる。

池長孟（いけなが・はじめ）の著書は、『紅塵秘抄』（東京堂）、『戯曲開国秘譚』（弘文社）、『狂ひ咲き』（福音社）ほか。また参考文献として『南蛮美術総目録（神戸市立博物館所蔵、旧池長コレクション）』（東洋書院）、高見澤たか子著『金箔の港—コレクター池長孟の生涯』（筑摩書房）など。

木下佳通代

7/22（土）～8/1（火）11:00～19:00

奥田善己

会場：ギャラリー島田

展

神戸市中央区山本通2-4-24 リランズゲートB1F

電話078-262-8058

熊田司

【木下さんが亡くなって四箇月後、神戸という小さく心地よい都市も自然の強力に揺さぶられて、至るところに廢墟が出現し、別種の空間になってしまった。木下さんが親しんだ仕事場、住居、そして日常の呼吸のように珍しくもなく格別でもない、しかし他にありようのない街並は消えてしまった。木下さんと等身大の、そして私にとっても等身大の神戸という（現在）は、もはや私のこころのなか、そして木下さんの透明で至福感に満ちた作品にしかない。再び問い返してみる、このささやかな幸福に満ちたアモルファスな（時間）とは、アートの歴史のなかで何だったのであろう。解答は、抽象表現主義でもなく、ミニマリズムでもなく、それ自身でしかない木下佳通代のペインティングを無心に視ることのなかに隠されているはずである。】

「時間のなかで—木下佳通代の作品に潜むもの—」より抜粋。

くまだ・つかさ。1949年生まれ。美術家。『小出権重画集』（共著）。

旅する巨人宮本常一 につぼんの記憶 みずのわ出版

定価 3000円＋税

本書は、生まれ故郷の山口県周防大島町以西の九州各地を歩いた宮本常一の足跡を、宮本が撮影した写真をもって再訪したルポである。（佐野眞一・解説より）

見んさい。蜜柑が喜うぢよる——梶田富五郎の記憶と島の畑と

柳原一徳

山口県周防大島は安下庄（あげのしょう）の母方の実家に、10坪ばかりの家庭菜園があった。祖母が生きていた時は、これで野菜はほぼ自給できた。貰い物も結構多かったから、田舎暮らしは表面上の生活費は安くつく。その代わり部落でのつきあいにカネと気を遣う。街ぐらしとどちらがいいか悪いかは人それぞれ、だ。

畑というのは、人の手が入らなければどうしようもない。祖母が亡くなって無人になってから家庭菜園はすっかり荒れ果ててしまった。3年くらい経ってこれではいけないと思い立ち、以降帰省する度にセイタカアワダチソウとひつつき虫の駆除に取りかかった。でっかいやつ、タネのついたやつは引っこ抜いてゴミに出し（部落の取り決めで野焼きは禁止されている）、こまい（小さい）やつは鍬を叩き込んで根を切り土に混ぜ込んでやる。

1年くらいそれを続けると、外来種があまり生えなくなった代わりに在来種が復活した。しっかりと根を張るだけにこいつの方が手強い。また困ったことに、小さいけれどもほんとうにいい花をつけるものだから、やつつきののに罪悪感が伴う。

それでも駆除を続けると、去年の夏には数年前にタネのこぼれていたであろう豆茶（大島ではそう呼んでいるが、一般にはハブ草のこと）が復活し、秋にはそこそこ収穫できた。こいつを焙烙（ほうろく）で煎ったやつをぐつぐつ煮出して呑むのが豆茶。これにコメを研がずにプチ込んで茶粥を炊く。増量のためサツマイモやらカンコロ（サツマイモの粉の団子）やらメリケン粉の団子やら入れることもある。平地が少なく大してコメのとれなかった大島の、文字通りの貧乏食だが、私たちの年代もまたこれを日々喰うて育った。この習慣を指して貧乏の象徴の如く虚仮にされたことは私自身の身の上でも幾度もあるが、それを自ら卑下したことだけではない。ただ、これが本土の者の眼からは単なる“遅れ”としか映りようのないほど、ついこの間までこの島は経済成長から置いてけぼりを喰らうてきた、というより忘れられてきた、ということなのだろう。その不幸こそある意味幸いでもあった、と今にして思う。それは稿を改めて記す。

話を戻す。再々帰省すると云っても、ひと月かふた月に一度、それも2、3日しか居られないのだから、もはや家庭菜園の復活は望むべくもない。

そこで、一昨年の春に雑柑を3本植えた。浜の側からスタチ、カボス、ライムの順で。温州蜜柑ならきちんと世話をみる必要があるのだが、雑柑はそこまで気を遣わなくてすむ。以前からわが家に植わっている酢橙と甘夏も、あまり世話をみてこなかったが、毎年律儀に実をつけてくれている。木が大きくなれば、雑草も生えにくくなる。

しかし、セイタカアワダチソウに土の精を吸われた所為か、雑柑はなかなか太らなかつた。今年の水仙忌（宮本常一の祥月命日）の頃に帰省した折、沖家室島（周防大島の属島）のいとこにその話をしたところ、肥やしの打ち方のメモを作ってくれた。それを参考に五月の連休の頃に春肥を打ち、土質改良のため石灰を入れた。畑の縁（へり）にスギナがわらわらと生えるのは、酸性が強くなっているイコール土が弱っている、ということだ。

御蔭様で、今年初めてカボスに5つだけ実がついた。これが大きくなってくれるかどうかは予断を許さぬが、3本とも目に見えて幹が太くなり葉の勢いも達っていたので、これからも帰省する度に世話をみてやれば来年はもう少し良い結果を出してくれることだろう。

「やつぱり世の中で一ばんえらいのが人間のようでございす」——これは、周防大島の久賀（くか）から対馬に渡った開拓漁民梶田富五郎に対する宮本常一の聞書の最後の言葉だ。メシモライとして七歳で対馬に渡った孤児が浅瀬という浦に住み着く。でっかい石がゴロゴロする浦、ここに港を拓く。二杯の船を並べ一人が潜る。蔓で作った縄を石に縛り付け満干の差を利用してひと潮に石一つずつ外海へ出す。それが大時化で押し戻される。「こりゃ石の捨場がわるかったのじゃ、もつと沖の方へ捨てにゃアいかん」——そうしてまた同じことを繰り返す。小さな港ひとつ造るのに30年かかった。ただそれだけの話なのだが、こんな無名の人びとが、この島の土を執拗に耕しつづけてきたのではなからうか。

もうひとつ、わが島の先達の話。うちの部落を見下ろす丘に、桜の古木がある。ここの桜は安下庄一だと、私は勝手にそう思っている。桜の木の下にはささやかな墓地があり、祖父母、母、私の三代にわたってこの地でお世話になった小父さんが眠っている。この春、久しぶりにここで友人と

2人だけの花見をして、小父さんに酒を供えてきた。

小学校から高校の時分にかけて、冬と春に帰省する度に、この小父さんの蜜柑畑の仕事に出た。冬は雑柑の収穫、春は春肥と選別。畑を打って（＝機械で耕して雑草を掻き込み、土に空気を入れること）、肥やしを入れていく。足を入れるとくるぶしまで埋まるくらいに畑を打つ作業は一日やると握力がなくなるし、丈が低い蜜柑の木の下

に潜り込んで肥やしを撒く作業は腰にくる。ひととおり仕上がった段々畑を見上げて、「見んさい。蜜柑が喜うちよる」と小父さんは云った。小父さんはまた「百姓がエライ（しんどい）くらいが、国はうまくいくんちゃ」と云ったこともある。その言葉の真意が、いまだに解らずにいる。

小父さんが亡くなって十数年になる。二人でえっちらおっちら世話をみた、あの段々畑も、いまは草に覆われている。（つづく）

光・灯台・エロス

—林哲夫に

間村俊一

その壁に灯台はあった。数冊の岩波文庫、履き古された靴、古風な菓壺などが精緻に描かれた作品に混じって、やや大振りな灯台の絵が入口付近の壁にひっそりと掛かっていたのだ。まるで異界へ向って開かれた窓のようだ。しばらく眺めていると、いつか自分もその灯台の中に入りこんでいる。初めて訪れた麻布十番の個展会場、ひと気のない画廊にかすかに海の匂いがした。

物体が放つエロティックな光。林哲夫の絵はどれも静謐な光を湛えている。明るく均一に塗り込められた背景と、そこに置かれた物の境界がわずかに滲んで見える。まるで光の皮膚に包まれているように。そこには見る者を突き放す冷たさがない。彼によって描かれた物は、それがいかに硬質な金属やガラスであれ、どこか軟らかな印象を与えるのだ。灯台も例外ではない。まるで夢の中で何回も訪ねたような懐かしさを感じる。人気のないあの灯台は何かを待っているのだ。これから起こるであろう事件の予兆としての灯台は、情事の果ての惨劇を予感させる光に満ちているようだ。ここでも林の絵は静謐さの裏に淫蕩なエロスの匂いを漂わせている。林哲夫はエロティシズムの画家である。

それ以来、どうもあの灯台に取り憑かれてしまったようだ。後日、その灯台もふくめて林哲夫の絵を光文社文庫版『神聖喜劇』全五巻のカバーに立て上げた。離島に繰り広げられる迷宮小説の舞台にふさわしい気がしたからだ。「ぼくは、実は灯台が大好きなんだ」第一巻を手にした著者、大西巨人氏の感想を編集者の鈴木広和が驚いた口ぶりで伝えてくれた。神楽坂の割烹「も一吉」で出始めのただ茶豆を前に祝杯をあげようとしたときのことである。

京都の湯川書房の店頭を借りてスケッチ展が開かれるというので出かけていった。こちらは近々

刊行する予定の同人誌に載せる俳句が出来なくて往生していた。御池通り近くの「河道屋」の奥まった部屋で昼から熟煙を前にぼやいていると、俳句などに興味はなさそうにしながらも、いつものやさしい笑みをうかべて耳を傾けてくれる。ときにシニカルではあるが林哲夫はやさしい。大人である。『古本デッサン帳』などの著作もあり文章も玄人であることは知っていたが、俳句とは無縁であると思っていた。そんな彼から『書影』と題する句集が届いた。和本の頁を折り畳んで表紙にした手づくりの造本が彼らしい。「発作的に思い立って作り始めた」とある。

見世びらきする書店あり初樓
綴じ糸のほつれも寒しみだれ草

やれやれ、恐れ入ったものだ。

さて『文字力100』、林哲夫の新著である。芥川龍之介『河童』から菊池寛『天誅罪羅通る』まで、その鋭い眼力によって選びぬかれた百冊が、最大五六〇字以内の解説と版元や版型などのデータ、およびそれぞれの書影によって見開きごとに構成されている。

文字や絵画にまつわるものばかりではない。『近世動物学教科書』に『ヴァイオリン独学び』、『大阪名鑑地図』、『軍人青年祝文演説模範』なんていうものもあるから驚きだ。いったいどんな本だろう。

しかし秀逸なのは一冊一冊に付された名人芸とも言える解説ではなく、著者本人によって撮影された百枚の書影である。林はそれら百冊をそれぞれ違った風景の中に置いて撮影している。たとえば阿部知二の『黒い影』は日中のマンホールの蓋の上に置かれて文字通り漆黒の影をアスファルトの路上に延ばしているし、『庭』なるタイトルの

謎の雑誌はまさに庭の木の根元にさりげなく置かれている。



集めたこの『文字力100』は、まさしく文字、

ベラ・エルレスなるハンガリー人の著者による『鉄火の試練』はごつい鉄製のスコップに載せられている。本の内容を髣髴とさせるではないか。おいおい、小池忠雄の『或る志士の生涯』は墓石とおぼしきところに立て掛けてあるぞ。嗚呼ー。「文字が主役になっているような意匠」を百冊

文字、文字のオンパレード。様々な種類の文字がっつき登場して来て飽きさせない。書物の意匠・装幀における文字の力の重要さをあらためて考えさせる、まさしく書物についたの書物である。

それにしても林さん、昨日また灯台の夢を見ました。あの外壁に穿たれた小さな窓から覗き込むと、そこには黄色いメガホンがひとつ、軟らかな光に包まれて転がっておりました。それはタイガースファンの画家によって故意に置きざりにされた夢の痕跡であったのでしょうか。林さん、どうか『続文字力100』では甲子園球場のホームベースの上に置かれた一冊の書物が撮影されることを願ってやみません。トラキチの装幀家より。

灯台や人妻の手のあたゝかし 俊一

文字力 100

これは古本力である 新書版フランス装・208頁

林哲夫著 みずのわ出版

定価 1800円＋税

歌、痕跡として

—映画『エドワード・サイード OUT OF PLACE』に—

手村敏夫

すべてのモノキュメントは崩れ落ち、大地に砕け散り、真昼の真空、うたれるがままに。いつせいに声がある、風のこともちだう父を亡くし、母を犯された彼らは、お決まりの無垢な敗者ではなく、石を握りしめ、废墟のなかで踊っている。

墓地にそそがれる陽射し。海、花々の向こうの。ここではない、どこか、四方八方、散っていく砂塵、血痕。

壁を襲撃せよ、私たちはだかるものはすべて、進むものとして、楽器を棄てた音楽家は進撃する。いつさいは判読不能、to the memoryというそよぎ以外は、壁の内部でつぶやく歴史家など格好の餌食だ。われらの神聖なるえに、そこでそのままうらふるえよ、扉という扉、窓という窓に、ひかりの破片がそそがれる。

窪地をたどってきた車から、白いシャツが躍り出る。山の霧に染まったシャツが泳いでいく。やつと訪ねあてた墓標、うずくまるような小さな文字。うたれるがままにせよ、墓の前に香り立つ一本のオリーブの樹、それは思唄、それとも静かな呪詛。

＊尾編ドキュメント『エドワード・サイード OUT OF PLACE』(佐藤貞監督)は、今秋、新開地の「神戸アートビレッジセンター」で上映予定。佐藤貞氏、東京大学文学部哲学科卒、映像作品に『阿賀に生きる』『まひるのほ』ほか。

本屋の目 番外編

平野義昌

私、書店員です。只今は元町通りの海文堂に流れ着いておりますが、季村敏夫さんとの御縁は、三宮の小さな店にいる時が始まります。友人の編集者が詩人と装幀家に会うというので、私、出版文化の香りというよりタダ酒・タダ飯の匂いを嗅ぎつけて参加したのでした。詩人としての御活躍は存じていましたが、「震災・まちのアーカイブ」の活動はまったく知りませんでした。数年を経て出版物を扱うようになった時に、範江さんと敏夫さんが頭の中で結びつくまで、相当の日数を必要としたことを告白いたします。

書店の棚は、この世の中の鏡です。多くの人が「カネカネ」と言えば、投資本がたくさん並びます。「純愛」だらけ、「韓流」ばかりともなります。「商売だから」を言い訳に売れるものは売ります。どの書店でも同じ本しか並んでいないという批判を受けますが、読者の要求であれば、読みたい人のために売ります。その一方、書店が売りたい本、読んでもほしい本をアピールします。これが各書店の個性、それぞれの担当者の腕の見せ所です。

海文堂は地元の本・震災関連本を大切にしています。店としての方針はもちろんですが、震災後に閉店や規模縮小などで、書店現場から退かざるを得なかった書店員たちもきっとそうするだろうと、私が勝手に信じているからです。と言っても、賢明な読者諸氏はすでにお気づきでしょうが、私、真面目一徹の堅物ではございません。当店ホームページの「本屋の眼」を御覧ください。「おちゃ

らけ・下ネタ・嫁の自慢」で、颯爽を買っております。本誌「なまず」の品位も落としたかもしれません。

海文堂は名前のとおり、「海事図書」の出版・販売でスタートしました。この分野では日本一を自負しています。メディアも取りあげてくれ、当店の看板で、航海の専門書だけでなく、海・船に関する本を幅広く置いています。各地の博物館の出版物や雑貨などマニアの心を掴むべく、担当は日夜奮闘しています。また、帆船をデザインしたブックカバーは、昨年、書皮友好協会の書皮大賞をいただきました。大型書店や全国チェーン店のようには大規模ではありませんが、サイン会などのイベントも大好きです。作家・画家・歌手……、変わった文化人たち(失礼)が集まってワイワイやります。6月は評論家・海野弘さんのサイン会、WAKKUNライブペインティングを開催しました。7月17日には画家・古書評論の林哲夫さんのトーク&サイン会を行ないました。

二階の「海文堂シースペース」を展覧会・集会で使っていただけます。お気軽に御問い合わせください。

丁稚どん 鯨とほん(本)の一踊り

海文堂

〒650-0022

神戸市中央区元町通3丁目5番10号

電話078-331-6501

無形の歴史

一川田順造『母の声、川の匂い』(筑摩書房、2006年)からの(再)出発—

山本唯人

3月12日、朝日新聞の書評でこの本のことを知り、3日後、ある戦中資料の閲覧に訪れた京都、夜のジュンク堂で実物を手に入れることができた。それ以来、一気にあらゆるものが押し寄せて、本音を言えば、もうしばらく何も言いたくないくらい心境的なのだが、そうもいかない。恐る恐る、見えてきた視界の先にあるものを書いて、一步を踏み出すことにしよう。

なぜ、「トーン・クラスター」なのか。川田さんは、震災、戦争によって、あるところからぶつりと歴史が途絶え、「もの」としては過去の痕跡が残らない下町の土壌のことをいう。あるのは、そこで暮らす人々の脳と身体に刻まれた「記憶」だけだ。この一人ひとりの過去として「想い描かれた次元」が無数の「自分史」となり、やがては群れとなって、ある全体を形作る。そこに現れるのは、この「声(＝トーン)」たちの群れを立ち

のぼらせる場として、とりあえず「地域」と名づけておく以外にないような何かだ。

この投げかけは、かねて私が執着してきた聞き書きの作業や、語り、話芸、芸能など（その発展は、川田さんの指摘する江戸東京の抱え込む風土と決して無縁ではないと私には思える）、物理的構造物としての形態や存続にこだわらない、「形無き」表現手段の意味の考察に、土台となる認識を与えてくれる¹⁾。

すべてが反芻の対象であるこの本で、私が最も執着するのは、「風の記憶」と「すみだ川」の連作である。前者は、川田さん自身が目撃した東京大空襲の記憶と、それ以来消息が途絶え、亡くなった叔母さん、その娘さんである従姉の思い出を綴ったもの、後者は、謡曲・すみだ川の主題である「梅若伝説」の由来を遠く中世にまで遡って説き明かそうとしたものである。川田さんはそのことをはっきりおっしゃっていないが、これら二つの作品はセットになって、川田さんが、「戦後」の崩れ落ちていこうとする時点に向けて、密かに放った戦争論だったのではないかと、私は思っている。

数百万の人々がひしめく下町を、とてつもない暴力が襲った3月の記憶と、遠く人買いにさらわれ、ここ隅田川のほとりで果てた梅若丸を、自らの無事と死者たちの甦りへの祈りを込めて祀ってきた3月の記憶は、今もなお、向島・木母寺で毎年催される梅若忌、本堂に立ち込める謡曲の唄声のなかで一つとなり、何とも言いようのない複雑な記憶伝承の空間を作り上げる。寺宝の絵巻物『梅若権現御縁起』に残る弾痕、そして、無数の弾片を浴びて立ち尽くす梅若堂の姿は、どうして、こうまでに見る者の記憶を捉えて離さないのだろう。

これまで、梅若堂のことを知らないわけではなかった。しかし、そのすぐそばを流れていたはずの謡曲の音色や、特に、梅若忌というマツリゴトの存在に全く気付かないでいたことに、私は少なからぬショックを受けた。梅若堂は地図に落としても、それと一体であるはずの唄声は記述にのぼらない。そうした意識の背後に、文字として定着したものや物の形で確認できる痕跡、建築物の遺構など、大量・不特定多数の人々に、比較的ぶれ少なく意味伝達しやすいメディアこそ記憶伝承に望ましいという、無意識の思い込みがあったことは間違いない。

「形無きもの」を運んでいける範囲は必然的にローカルであり、一過性的である。それは、ローカルな範囲にあればいいものであるだけに、時に閉鎖的であり、誰にもサインを送らず、容易に形を変えていってしまう。恒常的なもの、「形有る

もの」の代わりにその場を満たしているもの、それが、そこにいる一人ひとりを通して語られた声の群れ、「トーン・クラスター」なのである。

最近、私は、記憶伝承のために用いられる語り、歌、身振り、芸能、各種の行事など、恒常的な形なき表現手段を「無形表現」の世界とし、それ以外の、「有形」の表現との対比のなかで考察を進めることで、貴重な示唆が得られるのではないかと考えている。それは、今思えば、梅若の記憶の場所から目と鼻の先、春間近の向島百花園で蘇理剛志君が語ってくれた、モノローグ／シンローグの問題、つまり、それぞれのメディアが用いられる「場」の問題と密接に結びついている²⁾。『風の記憶』『すみだ川』から、長年の懸案であった『口頭伝承論』を一気に通読し、アフリカのサバンナから、志ん生、木母寺を通して、蘇理君の示唆した問題は広く、奥深いと思っている。夏の夜、声をかけられて参加した佃の盆踊りについても、あわてて記憶を紐解いている次第だ。

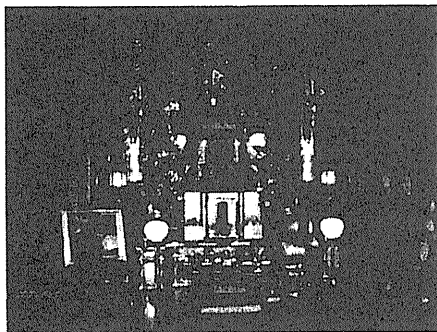
何かに向けて「出発」したいなどといえることは、そうそうあるものではない。無数の「トーン・クラスター」たちと出会った先に何が見えるのか、まだ分からない。そこに浮かんてくるものについて、またもう少し進んだところで報告できればと思っている。

¹⁾ 拙稿「思想としてのミュージアム、断章」『paper plane』no. 14, 2004

²⁾ 蘇理剛志「現代（語り部）考」2004. 2. 29. 記憶フォーラム研究会での発表。

編集部註 tone cluster（多様な声の集合）

木母寺（もくぼじ）東京都墨田区堤通2-16-1



今年4月15日の梅若忌。まだ唄声の余韻の残る本堂。左下に見えるのが、空襲下、梅若堂のシルエットに大炎上する木母寺堂の様子を描いた『木母寺堂上』

活動日誌

季村範江

5月から新しい人が加わりました。彼女は今年の3月まで、県の震災関連機関に勤務していました。新風を吹かせてくれることでしょう。念願の「灘ボランティア資料」のデジタル化もようやく完成、今後は解説を深めながら同時に、メンバーだった方々への聞き取りを始めます。以下、最近の活動内容です。

- 4月1日(土) 篠山市へ。「灘ボランティア」の代表だった中村由紀子さんを訪問。夜、「灘ボランティア」の清水信年さんも加わって懇親会。
- 4月2日(日) 「映像的思考の導入による資料解説方法」報告：季村敏夫、細見和之氏宅訪問。
- 4月8日(土) 「灘ボランティア」が教授 TENT を張った都賀川公園をたずね、ビデオ撮影。(季村敏夫・範江)
- 4月16日(日) 「瓦版なまず」創刊号(通巻18号)の印刷、発送。
- 4月24日(月) 「灘ボランティア資料」(ダンボール3箱分)のCD-ROM出来上がる。
- 4月25日(火) 「灘ボランティア」に会った清水信年さんと会う。(季村敏夫)
- 4月29日(土) 「灘ボランティア資料」解説方法を巡る討議。於：アーカイブ事務所。
- 5月3日(水) 徳永尚氏の『ヴェニスからアウシュヴィッツへ』(講談社学術文庫)をたずさえてヴェニスのゲットーへ。(季村敏夫、範江)
- 5月9日(火) 再び清水信年さんと会う。(季村敏夫、範江)
- 5月14日(日) 「灘ボランティア資料」に関し討議。於：アーカイブ事務所。
- 5月17日(水) 「瓦版なまず」18号合評会。於：やす田。(メンバー及び柳原一徳氏、島田誠氏、瀧克則氏)
- 5月21日(日) ウェブ担当辰巳大輔さん、純さん来室。近況報告と今後の活動について討議。於：アーカイブ事務所
- 5月26日(金) 「佐藤真が巡るサイドの世界」、長編ドキュメント「エドワード・サイド OUT OF PLACE」グイジスト版上映及び佐藤真監督の講演。於：大阪、サンプロホール。(季村敏夫)。
- 5月26日(金) 毎日新聞大阪本社社会部記者の中村一成氏来室。(佐々木和子、季村範江)
- 6月10日(土) 「灘ボランティア資料」解説方法を巡って討議。於：アーカイブ事務所
- 6月18日(日) 「灘ボランティア資料」解説方法を巡って討議。於：アーカイブ事務所。
- 6月23日(金) 「灘ボランティア資料」の閲覧。於：アーカイブ事務所(佐々木和子、季村範江)
- 6月25日(日) 「資料解説方法—ベルクソンの痕跡過剰性に触れながら」報告：季村敏夫。
ニュース番組等に映る当時の「灘ボランティア」の活動(ドキュメンタリー作品)を観る。

寄稿者紹介

徳永尚(とくなが・まこと)。1929年生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。著書『ヴェニスのゲットーにて』(みすず書房・和辻哲郎文化賞受賞)ほか多数。大阪大学名誉教授。

和田英子(わだ・えいこ)。1926年生まれ。詩集『点景』(小熊秀雄賞受賞)、『風の如き人への手紙—詩人富田啓花宛書簡ノート』(編集工房ノア)ほか。

間村俊一(まむら・しゅんいち)。1954年生まれ。装幀家。画集『ジョハニニ』(洋々社)。文芸同人誌「たまや」主宰。

山本唯人(やまもと・ただひと) 1972年生まれ。社会学。東京大空襲・震災資料センター研究員、東洋大学非常勤講師。「伊勢湾台風といずみの会」(「現代思想」2006年1月号)ほか。

柳原一徳(やなぎはら・いっとく) 1969年生まれ。「みずのわ出版」代表。『阪神大震災・被災地の風貌—終わりなき取材ノートから』ほか。

平野義昌(ひらの・よしまさ) 1954年生まれ。元町通りの海文堂書店勤務。

あとがき

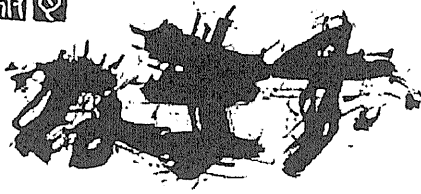
「待つ」ということ。その渦中に私たちは置かれている。現在「灘ボランティア資料」の整理を進めているが、解説の方法論、視点がなかなか定まらない。つかみかかっても、たちどころ崩れる。そのたびに思考が試される。向こうからの訪れをじっと待つ事態が続いている。そんなある日、徳永尚氏に出会う。リルケの詩作の現場であるドゥイノの城跡の眼前で立ちつくした徳永氏へ、ほくらは門をくぐりましたよとお話したら、中へ入りましたかと即座に返って来た。ふしぎな光を帯びていた徳永さんの声は、忘れがたい。(季村敏夫)

2006 年 10 月 7 日
2006 - 10 - 07

第2期・第3号 (通巻20号)



瓦版なまず 第2期第3号



Kawaraban Namazu

瓦版なまず
第2期第3号 (通巻20号)

編集人：季村 敏夫
発行人：季村 範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 神港金屬㈱ Phone : 078-681-6231 Fax : 078-681-6232

いのちの記憶

安水 稔和

生きているかぎり
生きているから。

焼けて流れて揺れて崩れる
さまざまの記憶の渦のなかから戻ってくる記憶。

忘れることで生きていけると言う人もいるが
忘れないで生きられるのだ。

たとえ忘れても忘れた私たちを生かすために私たちの記憶は帰ってくる
いのちの細部のよみがえりとして。

川の流れが止まり

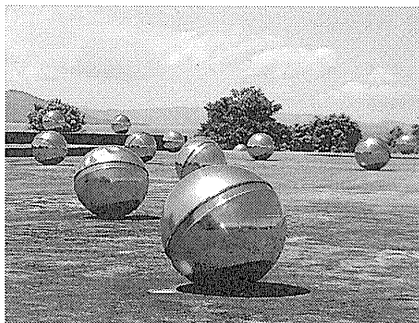
川の姿が極き消えても。

河原の乾いた砂が目路のかぎり続いても
水は足もとから突然噴き出す。

なにげなく吹く風にも

なにげなく流れる水にも

いつものように変わりなく生きる私たちにも
いのちの細部の記憶は刻まれている。



水俣メモリアル (設計者ジュゼッペ・パローネ、磯崎新・選)

「天文台殺人事件」の頃など

杉山 平一

一 探偵小説についてお聞かせください。

杉山 戦争から解放されると探偵小説などの魅力が倍加し、読みふけりました。今でもベーカー通りやスコットランドヤード（ロンドン警視庁）の名前が出ると心踊ります。水谷準（戦後公職追放）が編集長だった「新青年」という、当時ハイカラな雑誌がありました。木々高太郎や江戸川乱歩などが主要執筆メンバーで、谷崎潤一郎、佐藤春夫の影響下にある稲垣足穂や城昌幸（詩人城左門）の幻想的な短編などとても魅力的な世界でした。その影響でにわかにも私も、シャーロック・ホームズなどを読み出しました。

一 戦後復興の波に乗って、「宝石」とか「ぶろふいる」いう雑誌が続々と出たと聞きますが・・。

杉山 確か「宝石」（昭和 21 年 4 月創刊。岩谷書店）だったとおもいますが、探偵小説の募集をしていたのです。そこに私も、「天文台殺人事件」という作品を応募しましたが見事に落選、しゅんとしていました（笑）。あとで、応募者名と作品評が出ました。それを名古屋の服部元正さんが見つけたのです、何か書けということで、「赤いネクタイ」という作品を送りました。これが名古屋の服部さんが発行していた雑誌「新探偵小説」の 3 号（名古屋市中村区大秋町 4-4050・新探偵小説社・昭和 22 年 7 月発行・定価 18 円）です。

ある口関西で集まりがあるというので出掛けると、小さな探偵作家クラブがすでに出来ていて、神港新聞か神戸新聞かの座談会記事をおぼえていますが、当選した後に有名になった山田風太郎さんは関東の人ですが、大阪の大学の先生をしていた天城一、関西の香住春吾、島久平らが来ていました（天城、香住、島の三人は昭和 22 年、関西探偵小説新人会を設立）。それから神戸で会（昭和 23 年、関西探偵小説新人会が母胎で、神戸に関西探偵作家クラブを結成）をやるということで、東京から江戸川乱歩を呼びました。私も乱歩から文章がいいとほめられ、コントミたいに少年探偵小説めいたものを書き、自家中毒で亡くなった幼子へのはなむけとしてまとめた童話集『背たかクラブ』（昭和 23 年 12

月・国際出版）に、ちょっとうしろめたかったのですが、詩よりももっと詩らしいものという気持ちで二編（「足跡のなぞ」「埋もれた鐘」）を選び収録しました。装幀も挿絵も、全部私がしました。江戸川乱歩から便りをいただきまして、何となく安心いたしました。これが葉書です。



『背たかクラブ』

一 検閲が刻印されていますが、昭和 22 年 12 月からは事後検閲ですね。

杉山 事前検閲の占領軍検閲は厳しかった。乱歩の便りは、「探偵童話の試み面白く」というものでした。戦争中は灯火管制で、戸外は真暗、闇のなかを人びとは歩いていました。会社へ行き帰るのに、見るものいうたら空ですわ、星しかない、星がいっぱい出ている。

一 「動かぬ星」（『文学雑誌』6 号・昭和 21 年）「星空」（『新探偵小説』昭和 22 年 3 月）という作品が『ミラボー橋』にあります。

杉山 町の灯はない。だからもう星座をおぼえるしかない。おかげで、星座の一年の巡りをおぼえました。そんなことで「天文台殺人事件」が生まれたのです。

一 何枚くらいの作品ですか。

杉山 もう筋も思い出せませんが、古文書の欠字と星座の関係を書いたような気がします。私の作品は佳作にも入っていませんからね（笑）、忘れてしまいました。先日の冥王星について世界の天文学者が千人集まった壮観に心踊りました。

一 「天文台殺人事件」ですが、執筆に当たって影響を受けた作品、具体的にあるのでしょ

うか。小栗虫太郎や久生十蘭にあこがれていたという記述を読んだことがあります。

杉山 城昌幸の「チャマイカ氏の実験」という空中遊行の話など今もおぼえています。探偵法水麟太郎の「黒死館殺人事件」、あの独特な漢字のとり合わせ、ペダンチックな作品で魅力的でした。「聖アレクセイ寺院の惨劇」「絶景万国博覧会」など題名からして面白く、挿画作者も西洋人の顔が描けた松野一夫のほか茂田井武を指定していたようです。

一特異なルビ文字を多用していました。

杉山 小栗虫太郎の家には原稿をいただきに何度か伺ったことがあります。昭和 14 年のことです。私は父の尾崎の工場へ行くまで、田所太郎の編集する三省堂の総合雑誌「革新」の編集を手伝っていたのです。その雑誌には時局がら執筆依頼のなかった中野重治の「歌のわかれ」なんかも連載されていました。私は清水幾太郎、横光利一、高見順、丸山薫らの原稿をとりに行きました。当時の小栗さんの家にはお子さんがたくさんいて、元気に走りまわっていて、孤高、銜学晦洪のペダンチックな作品世界とはずいぶん違う、あたたかい雰囲気でした。

一「赤いネクタイ」というのはどのような世界なのですか。

杉山 密室での事件、戦後戦地から帰ってきた連中は兵隊時代の・・、

一復員兵のルサンチマンですか。

杉山 私は軽機関銃隊に配属され、軽機をかつぐのにもすぐにへこたれる、憂鬱でひ弱な兵隊でした。よく革スリッパの往復ビンタを見舞われました。軍隊時代の怨みをはらそうとおもう人がいました。よくいじめられたのです。中隊長クラスには立派な訓示なんかとくにうまい人がいましたが、下士官には乱暴な人もいて、戦時中の怨みをはらそうと元上官をたずねる。ところが再会すると、露天で下駄の歯入れをやっていた、それでもう、いえなくなってしまう。中隊長が戦後、行商人になっていたりするのはいづいことでした。

一戦時の記憶がベースになっているのですか。

杉山 密室の殺人です。夕暮れ、ものすごい悲鳴が部屋から起こり、助けてくれという叫び声がつづく。びっくりして部屋の扉を開けよう

とするが、中から鍵がかかり開かない。下に降りて合鍵を持って部屋に入ったら、もうそのとき悲鳴はかすれていて聞こえない。部屋は電気がついてなく薄暗い。スイッチをひねってもどうしても電気はつかない。電球ははずされてしまった。窓が開け放しになっていて、窓から見下ろすと切り立ったような絶壁。雨あがりに水嵩が増し、泡立つ濁流が流れている。部屋には誰か血だらけで倒れていた。ベッドも床も血で汚れていた。だがかすかな息があった。まだ生きていた。ドアのところに隠れていた犯人はやがて逃亡してしまった。そのあと赤いネクタイをした自殺した死体が窓の下の方谷で発見される。どうやら逃げた犯人らしい。遺書まで出てきた。ところが犯人は、誰か・・・。

軍隊での上官とその部下。上官は戦争犯罪に関わり、部下はその一部を負っていました。殺人の動機に、戦時中の恨みを少し使ってみたのです。施錠された密室に入る方法はないか。密室のトリックにこり、一時夢中になっていました。

一映画とは別に、探偵小説にも入れ込んでいたのですね。

杉山 そうです。セーラーたちや観光客が神戸の古本屋に売っていった推理小説の翻訳をした神戸の西田政治やそれを読んだ横溝正史らが推理作家になっていったのは、堀辰雄らが避暑に来ていた外国人たちが置いていった本を読むことから軽井沢文化は出来上がったと中村真一郎がいつていましたが、そのことに通じます。

一これほどまでのめりこんでいたとは、驚きです。

杉山 探偵小説、これは好きです。ある意味で詩なんかも、オチがないとどうも落ち着かない(笑)。

一萩原朔太郎の詩集『月に吠える』に、「はやひとり探偵はうれひをかんず」という忘れがたい一節がありますが、犯罪、血と憂い、ぞくぞくします。

杉山 朔太郎は乱歩に詩集を送りつけましたが、乱歩の朔太郎理解はどうだったのか。よくわからなかったといっておられました。探偵の意味がちよっと違っていたのかもしれませんが。

聞き手：季村敏夫

(平成 18 年 9 月 17 日)

それは水夫の読み捨て雑誌から生まれた

宮崎修二郎

「サイショウです」一瞬、戸惑った。まったく縁のなかったお名前、しかも女性の方だったから。「ライターです」とお仕事の自己紹介で、分かった。ああ、最相葉月さん。朝日新聞の書評欄のご執筆で存じあげている。

「お宅へ伺ってお話を伺いたい」とのお電話にまごついた。やつがれ、科学とはまったくの無縁。取材したいとおっしゃられても、「何かのお間違いでは？ それに、お越しいただいても、殺風景な堀建て小屋の書庫同然の家、レディをお迎えしても、第一お座りいただくようなスペースもない」と困惑し、「電話でご用が足りるようでしたら……」と、ご西下を拒むのに必死だった。ご用件の趣きを承って、記憶のフィルムを半世紀ほど巻き戻さねばならない羽目とはあいなかった。

「この度、星新一の伝記を書くことになったが、わが国のSFの開祖とも言うべき矢野徹についてのご交友のことなど」をお伺いしたいとの仰せ。

ああ、そんな友人が居た、居た。うん、神戸は東灘区魚崎町、阪神電鉄が跨ぐ住吉川のほとりの太平住宅の住人、駅近くに小さなDPEの店を開いていた。

「『これからはSFの世界が広がる』と矢野さんを励まし、後援を続けた友人が宮崎さんだったと聞いています」といわれても、半世紀も前のこと、記憶は定かでない。確か二科会の画家井川克己さんの通夜で知り合って付き合いが始まった。

ある日、相談を受けた。確かシカゴ在住のアカマンというSF作家のペンフレンドから、世界SF作家大会があるから、ご出席をーとの個人的な招聘があったというのだ。

渡米中の費用は当方で持つ、と夢のような話に「一緒に行こう」というのだから、即座に乗った。夢は一気に広がった。SFは矢野に任せて、こちららは、戦後日本で最初のアメリカ大陸の横断旅行ーそのルポの連載と行くべえ。蛇怖じず、向こう見ず、二人の若さはハーレタヴィッドソン社へのサイドカーの提供を依頼した。応諾を得た。計画はとんとん拍子に進んだのだが……。

やんぬるかな、突然やつがれは、肺結核で入院という羽目になった。片道切符だけでもお餞別に、「渡航費用に悩む」の苦境を紙面にアピールをした。その記事に呼応して、ある船会社が手を伸ばしてくれた。矢野君は薩摩守となって単身渡米した。

当時の『宝石』という推理小説雑誌に江戸川乱歩が「矢野という若者が、世界SF作家大会へ出席のあいさつに來た」旨のことを書いていた。その記事を病床で読んだことを思い出す。太平洋の揺れる汽船の中で翻訳したSFの原稿が、緑色のインクで書かれて、ベッドの枕上に届いた。

帰国後、彼は上京して確か国立市に居を構えた。年賀状を交換する程度で、顔を合わせないまま疎遠になった。新聞で訃報を見たのは去年だったか？

「その程度の思い出しかないんですよ。ご免なさい」とっさに“ニッポンSF史”のひとつま話のサービスを思いついた。

「明治十三年、神戸の井上勤という人が『九十七時二十分間世界旅行』、ええ、ヴェルヌのSFを訳してまして……大坂の書林三木佐助から出版しております。一緒に出たのが『開巻驚奇龍動鬼談』」。はい、リットン原著とあります。その後も色々今でいうSFを訳しては出版していますね。神戸は外国船のセーラーが読み捨ての本や雑誌を残して行ったゆかりがあるんですね。

そういえば推理小説開祖も神戸っ子さんですよ。神戸の新開地に横濱という栗屋(春秋堂)があって、その子の正史が、友人の西田政治と外国船のセーラーが売り払った古雑誌を古本屋で買いあさっては、これを訳して『新青年』などに紹介した。そう、矢野君がSFに取り付かれたのも、神戸の古本屋のセーラーの読み滓からなんですね。いやあ、いらぬ講釈をいたしまして……。やつがれ、神戸の文学史なんぞを執筆中なのでついつい、では……。

つわものどもが夢のあと

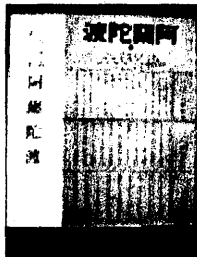
渡辺一考

神戸は多くの出版人を生んでいる。人口に膾炙するところの版元はよいのだが、忘れ去られたなかにこそ、個性豊かなひとたちがいる。お題は古書店であって逸脱かもしれないが、それら出版人の存在を私に教えてくださったのは他ならぬ古本屋の親父たちであった。そして、その古本屋が神戸の出版文化を支えてきた。

私が中学生のころから足繁く通い、懇意にさせていただいた古本屋は元町六丁目の俳文堂と同五丁目の黒木書店である。俳文堂の主人有川正太郎さんは沛文洞と号し俳句を嗜まれたが自らの句作は纏めず、第六和露句集『阿蘭陀渡』(昭和四十九年八月刊)を遺し、糖尿を煩って逝った。有川さんは白系露西亜人の末裔で女将(おかみ)は花隈の元芸者と、もっぱらの噂だったが、真偽のほどは存じ上げない。

当時、坊主頭の私は有川さん行きつけの蕎麦屋で俳句の講義を三日に一度は聴かされた。蕎麦屋は元町六丁目と五丁目のあいだに在った珈琲店である。新傾向俳句が新傾向風なマンネリズムから脱皮して自由なりズムをとるようになった大正初期の俳諧にはじまり、やがて元禄、寛永、正徳、享保の江戸俳諧へと談々の語語は遡って行く。其角、支考、許六、嵐雪よりは去来を、その去来よりは丈草を、暁臺、博良、几董、月溪よりは青蘊をといった塩梅で、根が天邪鬼だった私の至んだ性格をさらに助長させ、深化させたのは間違いなく有川さんだった。

第六和露句集の巻末に付された有川さんの「玉稿愚考」より引用する。



川西和露遺句集
『阿蘭陀渡』

川西和露逝きて三十年。

いま、和露第六句集を編みつつ、その玉稿より、ひとつの「驚き」を発見したのである。

(中略)

「コビヘツラウ」ことだけが尊重され、高貴な精神的なものを認めようとしまいばかりか、まかりちがえば、異端視もされかねないのが世の常で、私達の日常生活の周囲には勿論、あらゆる面においても「オベンチャラ」が余りにも多く感じられるのである。併も、純粋と知性を誇り、人格の反映でもあるべき筈の「芸術の世界」にあっても、それが常に醜悪な妥協となって、堂々と通用するのが現在社会である。

碧梧桐門の逸材で、その短律化された数多い和露の秀句からは、微塵も「オベンチャラ」を感じられないうばかりか、そこに瞑想的な寧実な真情を吐露する俳人の全貌をみることができるのである。そして定形化した「句の色と形」を、ものの見事に打ち砕き、読む者をして、和露との間に、美に、いのちに、連帯観すら生れてくる不思議さが魅力となってくるのである。

次に川西和露の略年譜を。

- 1875年 神戸市兵庫区東出町に生まれる。鉄材商を営む。本名徳三郎。
- 1907年 この頃より碧梧桐に師事。
- 1910年 摩耶会を起こす。玉島俳三昧に参加。玉島俳三昧とは備中の玉島で全国行脚中の碧梧桐を中心に十数名の同人が一つ宿に一週間ほど寝食を共にして催された俳三昧を指す。
- 1914年 第一和露句集上梓。
- 1915年 12月、第二和露句集上梓(短律見ゆ)。海紅同人。
- 1916年 12月、第三和露句集上梓(短律多し)。射手同人。
- 1914～1916年 和露主宰の俳誌「阿蘭陀渡」発行。
- 1920年 第四和露句集上梓。碧梧桐外遊に贈けて。
- 1925年 10月、第五和露句集上梓。碧梧桐銀婚式を祝して。
- 1938年 和露文庫俳書目をひむろ社より上梓。
- 1944年 須磨月見山へ転居。和露荘と名づく蔵書の散逸を恐れ、古俳書を天理図書館へ収め、明治以後の活字本を神戸市立図書館へ寄贈。
- 1945年 死去。享年七十一歳。

今日、『俳諧大辞典』を編くも俳人の部に川西和露の名は登録されていない。しかし、俳書の部には『和露文庫』が載っている。和露文庫が俳諧史の研究に大きな功績を残したことはひろく識られている。『和露文庫』は野田別天楼開題、安井小酉校訂になる『蕉門珍書百種』の後を追って出版されたもので、共に川西和露が多年蒐集した珍書佳冊の錨刻である。蕉門珍書百種刊行会と和露文庫刊行会は共に神戸市上筒井通七丁目にあったなつめや書店に設けられた。なつめや書店の店主は安井知之、小酉と号した俳人で、全冊の校訂兼発行者である。今回は『和露文庫』の詳細をご紹介します。

久保田さんの笑顔

林哲夫

去る七月十七日（二〇〇六年）、神戸元町・海文堂書店で「神戸の古本力」と題したトークショーを行った。拙著『文字力100』（みずのわ出版）の刊行記念ということで、『関西古本探検』（右文書院）の著者でフリー編集者の高橋輝次氏、「エエジナイカ」という書物ブログで人気の北村知之氏とともに神戸の古本屋について語り合う機会を作ってもらったのである。

京都・大阪と較べるまでもなく神戸の古本屋は震災以来の低迷がいまだ続いているように思われる。その典型的な例は、三宮のサンパルにあった「古書の街」がなくなってしまったことであろう。オープン是一九八六年の年末だった。小生が神戸の長田に転居したのも同じ年の三月だったのでこれはよく覚えている。「古書の街」には当初八店舗が入居していた。二〇〇四年に亡くなった間島一雄書店の間島保夫氏が音頭を取って実現したものらしかったが、徐々に店の数は減少し、五階から二階に移った一九九四年には四店舗になっていた。今、同所で踏ん張っているのはロードス書房一軒のみ。あまりに寂しすぎる。

トークショーはむろん自著の宣伝だったのだが、そんなふうにはやや元気のない神戸の古本力をなんとか奮い立たせたいという気持も少しはあった。三人がそれぞれ神戸の古いところから最近までの古本屋や神戸関係の雑誌などを紹介したなかで、会場でもっとも反応が良かったのは元町通五丁目にあった黒木書店の思い出である。逸話の多い店主だったので無理もない。ところが、トークが終わった後で、予想外の反響が何人もの方から寄せられたのは、五車堂書店・久保田厚生氏が亡くなったということについてだった。その第一は会場に見えていた本誌の季村敏夫さんである。季村さんは、驚いたことに、臨川書店時代に久保田さんの下で働いていたというではないか。さらに小生のブログにおいてトークショーの報告をし、久保田さんにほんのわずかに触れたところ、まったく意外な方から長文のメールをいただいた。『石神井書林口録』（晶文社）などの著書をもつ石神井

書林の内堀弘氏である。おおよそ以下のような内容だった。

一九七〇年代の末頃、久保田さんは臨川書店の中軸社員として大きな入礼会やオークションには必ず上京していた。内堀氏は当時、神田神保町の友愛書房の店員で、友愛主人が臨川書店と懇意だったため久保田さんと顔見知りになった。独立は久保田さんの方が後だった。開業の苦労話とくに金銭の苦労が辛いものであったことを聞いた。何年か前に岡山へ行ったとき、その頃、久保田さんが勤めていた万歩書店に電話をかけ、昔と変わらない誠実な話しぶりときちんとした対応に接した。決して懇意な間柄ではなかったが、懐かしい人である。いや、懐かしいのは、颯爽とした久保田さんを眩しうに見ていた「若造の私自身」なのかもしれない。

また岡山の古書店・蟲文庫さんからも、面識はなかったが、久保田さんが値付けした「万歩書店の棚にあった」本が店に入ってくるし、お客さんのなかにも「久保田さんにはずいぶんお世話になった」と言う人が何人もある、というコメントをもらった。

じつは神戸時代の久保田さんについては「火宅」というエッセイを書いたことがある。いや、久保田さんについてというよりも、それこそ久保田さんの店で遊ばせてもらった自分自身について書いたという方が正確なのだが、初出が同人雑誌ということもあり、思ったままを遠慮なくズケズケと書いた。さすがに実名は避けたものの、例えばこういう調子である。

《いつ訪ねても、ここの主人はたいい店番をしていた。思えばこれが良くない兆候だった。古本屋の一番大事な仕事は本を売ることではない。本を買うことである。コンスタントにそれなりの本を入荷できさえすれば、必ず成功する。そのために店主は東奔西走しなければならない。店主がのんびり店番しているようではロクな在庫があるはずもないのである。こちらはただの客なのでそんなことはおくびにも出さず、椅子を勧められるままに長居しては、本や映画や四方の話にひと

ときを潰し、「それではまた」と言って去るだけのことだった。

「あれでやっていければ言うことないですよ。いつでも店で小説を読んでも、客と話し込んでみましょう。他所で売り出しをするわけでもないし、かといって目録を出すわけでもない。きっと、よっぽどええ客筋があるんやろ、なんて皆で言うてたんやけど……」

とある同業者はもらしたが、まさにその通りである。そういう意味では、脱サラしたい本好きたちが憧れる理想の古書店主を実践していたとも考えられる。》

《閉店直後は唖然としただけだったが、今になってみると、惜しい本屋だったという気持ちが募るのを抑えられない。サルトルがひどい悪筆だということは彼の店で献呈署名を見て知ったし、前世紀末のウェブスターの辞書の貫禄も実感させてもらった。戦前のマッチ箱を多数張り付けたスクラップ・ブックのキッシュさだとか、荒保好みの植物図譜の精妙さと低俗さだとか、雑然とした記憶を点検してみると、彼の店は彼にとって現実に対面しつつ理想のプランを断念する場だったのではない、という気がしてくる。初めの頃にはときおり店番をしていた、後にはパートに出て姿を見せなくなった彼の奥さんは、店を閉じることになって心底「ホッとしました」ともらしたらしい。森閑とした狭い店の奥に彼の笑顔を見ることはもう二度とないだろう。噂ではその後、彼は地方のある古書店に就職したという。再びサラリーマン生活の安定に立ち戻ることができ、それはそれなりに幸福に違いない。だが、幸福はたいいいつも冷酷なものである。》

改めて読み返してみると、一九九四年、突然に姿を消した久保田さんに対して異議申し立てをしているような感じが感じられる。「火宅」はほぼそのままの形で拙著『古本デッサン帳』（青弓社、二〇〇一年）に収めた。

二〇〇二年七月二十三日、古本仲間のKさんからメールがあった。久保田さんが亡くなったという報せだった。Kさんは久保田さんが「火宅」を読んでいたことも教えてくれた。しばらくしてロードス書房さんからも電話があった。二十四日が告別式だという。借金ももうすぐ返し終わるはずだったのにさぞ無念だったろうとのことだった。後年、間島保夫氏を追悼しながらロードスさんはこう書いている。

《二年前の夏に、同じサンバルで店を張っていた五車堂・久保田さんの病床を間島夫妻、倉地さんと共にお見舞いに訪れたことがあった。すでに、間島さんは体調不良であったが、独特の熱のこもった口調で、久保田さんに、ガンの克服の仕方を

弁じていた》《久保田さんは、もう死を覚悟していた（ように私には思えた）のに、別れ際に、いけそうな気がするまで言っていた。実際はその数日後に亡くなることになるのだが、幸か不幸かは別にして、間島さんが居る間、再び生を時間意識の中にとりこんだように思えた》（『ロードス通信』17号、二〇〇四年五月）

京都のキコオ書店・前田司氏も「久保田厚生氏を偲ぶ」（『京古本や往来』96号）という文章で次のように書いている。

《七月中旬、神戸の間島一雄書店さんより電話。久保田氏が危篤で、あと一週間の命だという。翌日おっとり刀で神戸の病院に駆けつけた。ところが氏はベッドに横になってはいたが、あの人なつこいにこやかな顔で、キョトンとしている私を迎えてくれた。間島さんも大げさなことを言うなあーと笑って、久し振りに会ったなつかしさから、昔話やら大学予算の話、ついには古書業界の行く末まで、気がついたら一時間以上も話をしていた。「あー、これで十年は長生き出来そうだ」と言ったことが何やら気になった。／それから本当に一週間、奥様より彼の訃報が伝えられた》

享年六十二。前田氏によれば、久保田さんは満州生まれ。新潟県で育った。古書業界の巨人・反町茂雄をはじめ京都へ迎えて講演会を企画したのが久保田さんで、これによって京都の若手業者たちは電気ショックに等しい刺激を受けた。それを発端に京都古書研究会が結成され、現在では恒例となって賑わっている百万遍知恩寺「青空古本まつり」の開催へと運んでいったというのだ。

何を隠そう、百万遍の「青空古本まつり」は小生の古本道場であった。むろん久保田さんと知り合ったのもその手伝いをしていたときのことである。もし久保田さんがいなければ、わが古本道もまったく違ったものになっていた……。知恩寺境内でいきいきと活躍している久保田さんの姿は今もまったく褪せることはない。それは小生自身の大切な青春の一齣だから。

五車堂書店 books-goshado	店 〒651 神戸市中央区雲井通5-3-1 サンバル古書のまち ☎(078)261-2777 自宅 〒673 神戸市西区学園西町7-3 710-401 ☎(078)793-1110
久保田 厚生	
11:00AM-7:00PM	
学術研究に役立つ本 見て楽しい本 読んで面白い本 時代の新旧と洋の東西を問わず 古書全般を扱います	

久保田さんよりいただいた名刺

『2001/新潮社』。築百年の棟続きの長屋が、両隣は建てかえられ、もと米屋の一軒のみが今はこのころ。建物全体がよじれる具合に傾いて、SUREの部屋は壁がこちらへ倒れてきそうに見えた。いまでも家は刻々と傾きを変えているようだ。とくに街子さんは朽ちる家の呼吸を心得たように、父、米屋だった祖父の家で暮らし、SUREの活動を一体としているようだった。

SUREはScanning Urban Rhyme Editorsの頭文字から取られ「街の律動を捉える」という趣旨を示す。街の律動は、あの朽ちる家の呼吸からも、感じられてくる。あるときは歩行のリズムを思想として捉まえる。美しいもの、愛すべきもののリズムがそこにはある。私は北沢さんの歩く姿を思いだしていた。

「昨日手近にあったものが、今は無限の距離をもって、しかもそこにある。自分を作ってきたものから今日の自分はへだてられる。愛するものは背を向け、しかし今日ほどそれをいとおしんだことはない。」(北沢恒彦『家の別れ』/1978/思想の科学社)



イラスト 北沢街子

編集グループ〈SURE〉 <http://www.groupsure.net/>

代表 北沢街子

〒606-8301 京都市左京区吉田泉殿町 47

電話/ファクス 075-761-2391

メールアドレス info@groupsure.net

夏のノートから

—宮本佳明著『「ゼンカイ」ハウスがうまれたとき』(王国社)に触れながら—

季村敏夫

建物が人をつくるとは、須賀敦子が女子大生のころ聴いたドイツの神父からの一撃だが、逆転したこの言いようはその後、私にも刻みこまれた。

【「つくる」という原罪】。宮本佳明は、新著の冒頭でこんな過激なことを繰り出す。「建築の倫理」というタイトルのエビログでは、【何か他のもののためではなく、ただ楽しいから、あるいはただ悲しいから歌う、そんな建築ができないものだろうか】註と、ポップスとしての建築を夢見る。【危うい生き物であること】を自覚する宮本さんは、存外手まり歌にうち興じる江戸の風変わりなお坊さんに近いのかもしれない。

事物はなぜつくれるのか。つくり、名づける行為が世界の始まりなら、原罪は超越者こそが背負うべきで、以後すべてはゆるされている。愉しいから、ただ哀しいから歌に委ねるとはそういうことだ。だがつくられて、在ること。それはいかなる事態か。宮本さんは建築家として逃れられない西欧的な構築性という考えを解きほぐそうと、手直し、再生という修復、補修の思想に注目する。以下、今年の夏のノートからのレポートである。

どこからともなく人が集まり、出遣い、眠るための容器(家)をつくる。眠る姿勢と、それを受け入れる地形との関係。この関係を問うことは都市論の初心だが、建築家は職能的に都市づくりに



宮本佳明の
『「ゼンカイ」ハウスがうまれたとき』

深く関わらざるを得ない存在である。宮本さんは記憶の器としての地形にこだわる。阪神大震災の二年後に書かれた冒頭論考「もうひとつの廃墟論」のなかの「地形的な癒し」は、何度読んでも感動的だ。

【仁川、夙川、芦屋川、住吉川、石屋川と、いくつもの天井川を越えて、西へ西へ理由もなく自転車のペダルをこいだ。そして、それが、肉体的な苦痛と同時に安らぎに似た感覚を与えてくれたことを覚えている。意味もなく、地形を歩くこと、自転車をこぐことで、震災を受け止めることができたように思えた。】

地形の解説方法が本書において示される。その一つが「環境ノイズエレメント」という考えである。ノイズとは、忘れられた掩体壕のような、風景のなかの異物のことである。宮本さんは土地の

来歴を引き出しながら、都市を歴史の重ね書きとしてとらえる。

この考えを私は、ネクロポリス、証拠隠滅の水俣の埋立地を巡りながら抱いていた。眼前には、「二度とこの悲劇を繰り返しません」と刻印された慰霊碑。これでは広島原発の慰霊碑と何ら変わらぬものであり、どちらも加害の責任が明確な受難にもかかわらず、どうしてこうも主体の曖昧な発想に終止するのかと暗澹とした。足元の土の下には、漁師さんを苦しめた大量の有機水銀が不知火海の魚や貝や海老とともに埋まり、この場所に立つこと、歩くことは、亡くなったものらとのダイアログに他ならなかった。

音楽家の港大尋さんの呼びかけで、水俣に来て今回で四度目。埋立地の水際で、宮本さんのことを抱いたのは三度目だった。崩壊が人をつくる。壊れたからつくる、つくるから壊れる。建築の悲劇といわれるが、地震という崩壊の現場に立ち会った一人として私は、破壊から生まれる創造の欲望のなかに破壊が孕まれていることを身体で知った。そのことを一介の漁師である緒方正人が、違う方向から言い当てていることを知らされ驚嘆したことがある。

【潮の力とか海の力という圧倒的な力の前には、人間のつくったものなんてわずかな時間しか原型を保ちきれないという気がします。いずれ壊れる。おれはそのことに、どこかで心地よさみたいなものを感じますよ。】（『語り：つむぎだす』東京大学出版会）

われうたう 故にわれあり

港大尋

「うた」を、われわれの身体の不健全な自由の表れ、として捉えることができるだろうか。あらゆる意味での抑圧を逃れ、時間的・空間的な束縛から解放されうる契機となるだろうか。どんなちっぽけなうたでもいい、そのうたをうたう人のかけがえのなさ、を大切にしたい。うたはそのまま、時間観・宇宙観の表れであり、生身の身体哲学の生成そのものである。そのようなうたを、いつまでもうたいたいし、聴いてもみたい。

だが、たとえば君が代の問題をとってみても、うたは危機に瀕していると言わざるを得ない。巨大なシステムと化した音楽産業においても、本来のうたの力はズタズタに弱体化されてしまった。モダニズムは身体を徹底的に抑圧してきたし、今もなお、し続けるだろう。それはやはり水俣の問題でもあり、日本の問題でもあり、地球の問題でもある。そのようなさまざまな問題系の交点としての、ささやかなコンサートを開きたい。

核不拡散がまったく進行せず、むしろ後退していることに、つい先頃、長崎市長が怒りを露にしていた。世は靖国問題で揺れ、戦後は戦後ではないかのように、論争が広がっている。

正人さんには凄みがある。とりわけ防災（国防と読め）や歴史に携わる若い研究者は学ぶべきだ。支援者といっても、あくまで知識で関わる「よそもん」を一撃する迫力を読みとれないものが、お上の研究室に閉じこもった議論の明け暮れに自足できるのだろうか。そこまでいえば脱線気味だが、研究者にありがちなやわな傾向は、石や草のことによって一度粉微塵になったほうがよい。いま踏みしめる地の草、足元に転がる石の存在に、畏れをもって近づき、遠ざかるべきである。

原罪なる発想から、癒しや和み好みの日本的思考はあまりにも遠い。だが原発投下や水俣病のような理不尽な受難の場合、思考の様相は一変する。そういう場所では、ヤスパースの敗戦後の『戦争の罪を問う（責罪論）』などがいっきよに迫ってくるのではないか。水俣の現地に身を置き、土地の風になぶられながらそうおもう。「チッソは私であつた」という境地にたどり着き、今なお関わざるを得ない漁師。高度経済成長の人柱である胎児性の患者さんを眼前にしたとき、よろぼう私を支えてくれたのが、【つくる人としての畏れ】を手放さない宮本佳明のエチカであつたこと、夏の記憶として記しておこう。

註 1981年4月10日のシンポジウム「水俣が生み出す言葉、吉田喜重+原広司+土本典昭」で、建築家の原広司は、水俣の運動がもつメッセージはマイナスの中心としての「去りゆく空間」、何か哀しいとかいうのではなく、ものすごく晴れやかな感情移入を誘ってくれる喚起力ではないか、と発言していた。

われわれはいまだ、カフカの城を、ベケットのゴドーを待ちながら、永遠の遅延を生きているようだ。だが、解決をあきらめるわけではない。来るべき方向を見据えてもみたい。

デカルトは「われ思う、故にわれあり」と書いた。
セネガルの大統領にして詩人のサンゴールはこれをもじって、
「われ踊る、故にわれあり」とアフリカ人の心性を表現してみせた。
では「われうたう、故にわれあり」とはどうだろうか。
今日、このような言い回しが、果たして可能だろうか？

活動日誌

2006年

- 7月12日(水) 「灘ボランティア」メンバーだった三木まさよさんにインタビュー。聞き手：佐々木和子、藤原直子、季村範江。於：兵庫県国際交流協会
- 7月15日(土) 「瓦版なまず」第2期2号の印刷、発送作業。
- 7月23日(日) 「灘ボランティア資料に対峙して」発表：水本有香。於：アーカイブ事務所
- 8月5日(土) 読書会『他者と死者—ラカンによるレヴィナス』(内田樹著)。発表：佐々木和子。海文堂書店の平野義昌さんを囲み交流会。
- 9月2日(土) 研究会「コーディネートボランティア活動の現在と今後」講師：林律子(コープ活動サポートセンター・住吉) 於：アーカイブ事務所
- 9月18日(月) 「瓦版なまずの方向性について」於：アーカイブ事務所

寄稿者紹介

- 杉山平一(すぎやま・へいいち) 1914年生まれ。『杉山平一全詩集』(編集工房ノア)ほか。
- 扉野良人(とびらの・よしひと) 1971年生まれ。僧侶。「羊飼の夢—プライヴェート・プレス游牧印書局と『游牧記』」ほか。
- 林哲夫(はやし・てつお) 1955年生まれ。画家。『古本デッサン帖』『文字力100』ほか。
- 林宏仁(はやし・ひろひと) 1974年生まれ。神戸華僑歴史博物館事務局長。「関西華文時報」で映画コラム執筆。
- 港大尋(みなと・おおひろ) 1969年生まれ。音楽家。バンド「ソシエテ・コントロール・レタ」を率いる。
- 宮崎修二郎(みやさき・しゅうじろう) 1922年生まれ。『柳田國男・その原郷』『神戸文学史夜話』ほか。
- 安水絵和(やすみず・としかず) 1931年生まれ。詩集『蟹場』、『生きているということ』ほか。
- 渡辺一考(わたなべ・いっこう) 1947年生まれ。モルトバー「ですべら」店主。編著『鏡花論集成』ほか。

あとがき

今号を手にし、おやつとおもわれる方は少なくないだろう。ストリートワイズとしての一つの在り方を試みたからだ。グループ名の震災という冠、その検証は一見薄れてはいるが、誌面の背後、災害資料の収集、解説や研究会は継続している。私たちは地震を契機に遭遇した集いである。当初の活動は、社会学、建築、歴史、民俗学などを専攻する研究者との交わりをエキスとして進められた。昨年1月の北野のキャップハウスでの展示のあと、主要メンバーの病死等あり、一旦活動は休止。試行錯誤を繰り返しながらやがて再開、現在二期目と称してはいるが、残ったのはほとんど主婦。以前のひとはそれぞれの道を歩みだしていた。草の根のアーカイブ、本物の素人を目指すにはここからが始まりだが、引込思案の傾向がづよいので、誰かが動かねば自ずと停滞した。以後の在り方の一つを示そうとしたゆえんである。日々まな板に向かうサザエさんたちに甘え、試みということで我儘をさせてもらった。忝いことである。おかげで、どの依頼にも出遭いがある仕事に関わることができた。いづれにせよ、存分に験される。(季村敏夫)